例で、中には墮胎を死刑にした人民もある、近くは基督教が此主義をとつて居るが、今尙秘密に於て此墮胎罪が遍く世に行はれてる事は事實である、のみならず殺兒罪も吾々のよく見る所で、嘗て希臘や羅馬では新たに生れた兒は生きてる權利を未だ認められなかつた事もある、古獨逸に於ても又アラビヤに於ても嘗ては子を生き埋めにする事が行はれた。

出産數を制限する風習より、更に又自己の行爲を隱蔽する爲に、かゝる不順な悲慘な犧牲になつた人は古來幾人あるであらう、ニューサウスエルス、ニューギニア又はアール島等では、墮胎、殺兒の爲に殆ど人口の亡滅を來した實例さへある、斯くの如きは人間の有する種屬保存の本能の薄弱を示すものと見ねばならない、かゝる不調和な現象は漸次減少するではあらうが、之は道德上に大



きな關係がある。

之につれて考ふ可きは社會本能に就てゞある、人間は社會的動物と云はれて居るが此本能が與へられた事は時間上より云つて比較的新しい事である、昆蟲類には發達した社會本能を有してるものがあるが哺乳類の動物には此本能は極めて弱い、高等猿類に於てすら此方面に關しては甚だ幼稚で多少群をなしてゐる時があるが普通は五匹六匹である、彼等が群集する時は叫んだり叩いたり戯れたりするが之は正に社會本能の端緒を示して居るものと見ていゝ。人類は之に比すれば遙かに發達したものと云へるが生物史上から云つて、人類の社會本能を得た事は極めて新しい事と云はねばならない。

古來此社會心は吾人の幸福の基礎と見做されて、多くの思想家は道德の根本

を他人を愛する心の上に置いて、人生の究竟の目的が利他相愛に存する事を主張してる、然し吾々は新しい歴史を有する現時の社會本能に、凡ての道德の標準を置く程、それを信頼する事は出來ないのである。生殖本能の傍(かたはら)には手淫、姦淫の紊亂が伴ない、種屬本能の傍には墮胎罪、殺兒罪が伴なつてゐる、社會的本能が慈惠の事業を行ふ時に、一方に於て其本能は惡事を達する爲に應用せられてある、國家と國家との同盟は裏面に於て他を排し亡ぼさんとする目的が存して居る、人は平和を抑望して然も殘忍な戰爭は歴史より絶えた事がない。吾々はかゝる社會本能を一家族に一國民には た同人種に同宗敎に限る可きであるか、多くの團結は凡て深い起原を發達せる社會本能に發するのではなく、恐らくは趣味の一致、或は相似たる主義、相類せる文明等の結果に外ならない



のである。吾々が現今有する相愛の念、社會的精神とは、未だしかく完全なものとは云へない、學說は一切の人類が共同一致を唱導して居るが、依然として人種問題は文明國に於てすら混亂を極めて居る、從つて吾々は、歴史新らしく未だ强固ならざる此社會本能を出發點として、其上に完全な道德的基礎をおいて吾々の理想を建設する事は出來ないのである、食物の撰擇本能又は生殖上の本能が不完全なる故に、是等に對して相當の指導を要する如く、吾々は社會本能に對しても其方向目的を明かに指示しなければならない、かくして後に始めて人類の幸福を計り得るのである、吾々は此社會本能を如何なる方向に、又如何なる點迄働かしむ可きであるかを考へねばならない、「人道」を達するには吾々の此本能は未だ甚だ哀れである、吾々は此本能に存する多くの不調和を先づ除

かねばならない、人はよく人類の幸福を唱へるが問題は複雜である、個人の幸福は必ずしも社會の幸福でなく、社會の幸福必ずしも個人の幸福でない、人と時代と境遇とによつて各々幸福の內容は異つてゐる、吾々の不幸とは主として根本を人間の性そのものゝ不完全なのに基いてゐる、從つて單に人爲的道德を以て其行爲を可決する事も出來ず、又道德の基礎を不調和なる人生の上に建てる事も出來ない、換言すれば不調和なき吾々各個の性に於て凡ての合理的解釋を見出し得るのである、故に吾々は人生の不調和を調和に改變して、かくて眞正なる幸福は到達し得られるのである。

## IV　自己保存の本能に存する不調和

吾々が有する種屬保存の本能がかく不完全なのに比して自己保存の本能卽ち



生命を愛する念は甚しく强くなつて居る、此本能は殆ど凡ての生物に發達し、原形質の微細なものにも敵を防ぐ爲に殼を以て蔽はれて居るものがある、植物の如きは或は蘚を以て或は毒ある液を以て自己を防衞するものがある、動物間には殊に種々な方法が用ひられてある、甲殼を有し不快は液體を分泌し或は强い齒の如き武器を有するのは凡て自己保存の爲に外ならない。

然し是等の自己保存の念は死の如何なるものなるかを意識して後發達したのではない、或肉食獸類は死體を識別する力を持つてゐるが、主として運動の靜止を以て死と感じる故、彼等が死に對する觀念は甚だ不明である。之を適應して自ら死眞似をするものさへある、多くの昆蟲に此現象を見るのは普通で之は又一種自己保存の本能である。多くの哺乳動物は殊に死に對しては殆ど無智で

鼠等は死んだ仲間を喰ふ事すらある、唯生物中に於て死の避く可からざる事を知り、死の恐怖を感ずるものは人類ばかりである。

然し生命の愛、死の恐怖は年齢によつて差違がある、往々幼兒が死人を見て非常に恐れを感じる場合もあるが、死に對する本能的恐怖に密接の關係ある此自己保存の本能は、青年時代に於ては餘りに發達しては居ない、從つて若い折は概して生命を愛する念に乏しく好んで自ら犧牲となる事が多い、厭世主義者自殺者の年若い人に多いのは一面に於て此眞理を傳へて居る、もとより厭世の念は健康、境遇に大きな關係があるが、年齢とは最も密接な關係がある、ショーペンハウエルが彼の厭世哲學を世に發表したのは三十一歳であつた、ハルトマンが同じ見解を發表したのも二十六歳の頃だつた、之に反して樂天主義を唱



へた人は多く年更けた人である、ラボックが「人生は大なる賜物也」と叫んだのは彼が五十二歳の折である、メービアスの語る處によれば、かのショーペンハウエルすらその晩年には彼の哲學觀にやゝ樂天的傾向を染めたと云つて居る彼は七十歳の誕辰の折、ウバニシャッドの思想になぞらへて百歳の壽を保ち得る事を望んだと云ふ。

かく死の恐怖、生の愛着は若い折は薄弱であるが年と共に其本能は增加するのである、老人が死を怖れ餘生を惜み、生命に戀々たるはよく見る處である、ルーソーが「人生は喜過ぐる時益々之を愛するの念强く、老人は青年よりも遙かに生命を惜む」と云つたのは眞理である、然し何人と雖も死を怖れないものはない、彼は又「恐怖なくして死に面し得るものは僞善者なり」と云つてゐる。

嘗て年老ひた女の人が病んで正に死なうとした時、彼女は死に對して何等の恐怖なく寧ろ死を悦ぶ可き旨を述べた、然るに幸にして病が再び快癒した時彼女は非常な喜の情を現はしたと云はれて居る、よし人生を樂觀する人でも何等かの意味で死を痛ましく思はない人は無い。

古來この死の恐怖は幾多の人の心を惱ましめてゐる、佛陀が發心して深夜宮殿を逃れて、道を極めんが爲に山深く分け入つたのも老病死に對する悲慘を感じたが爲である、佛陀の此懊惱はやがて佛敎の萠芽となつて人生に對する否定的、厭世的宗敎思想を形造つたのである、一切の哲學は涅槃の敎へに盡きて居ると叫んだかのショーペンハウエルの厭世哲學も要するに死の問題と離れ難い關係を有して居る、「吾人に落ち來る最大最惡の不幸は死也、死の恐怖に比す可



き恐怖あるなし」とは彼の言である。嘗てゴンクールは己れの棺を横ふ可き地を先づ探さなければ決して移轉する事はなかつたと云ふ。ゾラの母が死んだ時、階子段が狹いので止むなく棺を窓より降ろした事がある、それ以來ゾラは其窓を眺める毎に、次に其窓から出る者は誰なるかを考へずには居られなかつたと云ふ。近世の思想家に於てトルストイは最も多く死に就て物語つた人である、彼が「吾が懺悔」に哀れなる此惱みが畫かれてある、「人生は盲目なる巷のみ、吾れは活き働きかくて前に進めり、而して今や深淵の緣に立てり、されど吾れに殘るものは何物もあらず、唯そこに陷るのみ、さはれ吾れは尙吾が步を留めて再び歸る能はず、はた惱みと、避く可からざる死とを見ざらんが爲に我が目を閉づる能はず、そは空也、凡て虛也」とは彼が惱懊の聲であつた、彼

は一度は此苦悶を脱せんが爲に自らを殺さんと迄計つたのである。後年彼自ら「死の恐怖」と題する書を著はして遂に死の恐怖は迷信であり、そは人生を誤解せるが故に起るのであると結論を下して居るが、此死が吾々に苦い經驗を與へる事は明かである。

加之此恐怖は吾々にとつて疑ふ可くもあらぬ本能である、ショーペンハウエルに從へば死に對する恐怖は知識上より云へば何等の根據もない、故に其働きは吾人の合理的意識ではなく、他の一つの盲目なる意志の働きであると云つてゐる、而してかゝる意志とは卽ち吾等の本能である。「嫌ふ可く見えざる死の本能に對する本然の執着を除きては、吾れに死を憎む可き謂はれなし」とは詩人バイロン歌つた處である。



吾等はかく生を愛し死を恐れる二つの本能を有すると云はねばならない、而して此本能の特色は齡を追ふて其度を强める事である、他の本能例へば飢渴、性慾の如きは滿足せらるゝ時があり、消ゆる時があり再現する事があるが、生を愛する本能は徐々として年と共に加はる性質を持つてゐる、然るに年老ひて死に對する恐怖の念が强まると共に、彼等は醜いものとして又勞働力の無いものとして世人から嫌惡せられてゐる、從つて老人を殺害する事は往々ある事で下等人種には遍く行はれてゐる、フィーヂーでは老人を無用のものとして生き埋めにする風習がある、オーストラリアでも同じ樣に働く力の無い者は、人々から棄てられたり、殺されたり時として食物にさへされる、フエゴーの土民には犬の前で老ひた女を殺して食べる風習がある、何故と云ふと犬は海豹を捕る事が

出來るが年とつた女はそれが出來ないからだと云ふ、かく老人を殺す事は普通にある事であるが文明國に於てすら此犯罪は非常に多い、かのドストイエウスキーの「罪と罰」の中にも青年が無益な害ある老人を殺す事は世の爲めであると論ずる所がある。

老人はかく殺害せられる事が多いと共に、悲慘な自殺に其終りを遂げる者も多い、統計の示す處によれば千八百七十八年プロシャ十萬人の人口中、二十歳から五十歳迄の人で自殺した者が百五十四人、五十歳から八十歳近の內では二百九十五人あつたと云ふ、又自殺者の最も多いコッペンハーゲンでは十年間に只五十歳から七十歳迄の年齡の人のみで自殺した者が三百九十四人あつたと云ふ、其原因の多くは世人より憎まるゝ事と、貧と病とであつて青年が生命の執



着弱いが爲に易々として自殺するのと異つて、老人は一方に於て強く生を愛する念を伴なつてゐる、今や此憂を除かんが爲に多くの國に於て公に年老ひた人の爲に慈惠院が出來て居る。

かく一方に於て年の加はるに從つて生命を愛する念と共に死の恐怖が增すに對して、他方に於ては世より無用のものと認められ、智力衰へ、體質弱つて悲しき終を遂げる事は此世に於ける大なる不調和の一つと云はねばならない、卽ち自己保存の本能に死の恐怖が必ず伴なう事は不順なる現象である、幾多の人は之が爲に心を痛め、死は解けざる永遠の謎として、遂に懷疑に陷つて痛ましい終焉を遂げたのである、此惱みより救はんとして立つたものは先づ宗敎である宗敎は要するに死に對する解釋に外ならない、知識より之に答へんとしたもの

は哲學である、ソクラテースが「哲學的生涯とは死に對する絶えざる冥想也」と云つたのは其爲である、ショーペンハウエルも「死なくして哲學は存せず」と云つて居る、げに是等の苦悶なくして宗教も哲學も起つてはゐない、然らば彼等は人性の不調和より來れる老病死の問題を根本的に解決し、人生に最終の歸趣と慰安とを與へたのであらうか、人性の根本問題に觸るゝ力無しとせられてゐる科學は何者をも云ひ得ないのであらうか、試に老衰及死亡に關する科學的研究を書く前に是等人性の不調和に對する宗教及哲學の解釋を顧みねばならない。

## 二　宗教及哲學的人生觀

### 一　宗教的解釋



惱み多く苦しみ多い此世に於て如何にして幸を得べきか、何處に眞の悅を求む可きか、かゝる問に對して早くから答を試みたものは宗教である、所詮宗教とは吾等人類の大なる疑問たりし生と死との問題に對する解釋に外ならない、彼等は暗々裡に人間の性より來る多くの不幸に向つて救濟を與へんとして居たのである。

原始時代の民が自己の經驗を出發點として、一切の他のものに自己と等しき性質を有すると見たのが宗教の起原である、卽ち原始的宗教思想は精靈說（Animism）で一切の萬有が個々に精靈を有すとの信仰は遍く彼等の信じた處である從つて死を終焉と見ずして、單に一變化と見、そを永遠の滅亡と見ずしてそこに生を認め靈の存する事を信じて居る、こは明かに生の保存死の恐怖に對する

要求の聲で、此思想は嘗て人心に慰安を與へ希望を與へたのである、かくて來世の存在と靈魂不滅の觀念は等しく此要求を滿す爲に多くの宗敎によつて說かれた敎理である。

かゝる思想は古くより且つ至る處に行はれて居る、死者を葬むるに際して、日常彼が用ひた武器、衣服、器具を共に埋め、或は來る可き長き旅にとて食物を添え、遊び戯れる爲に小兒には玩具を與ふる等は、等しく死者にも生命あると認める思想から來るのである、コンゴー地方の民は死者の口の部分だけ土地に穴をあけて日毎に食物を與へる風習がある、古代では殊にかゝる習慣は强く今尙スペーインでは年毎の忌日にパンと酒とを墓前に供へる風がある、然も人は只無生物を死人に供へる事に滿足しないで多くの動物又は奴隷を犧牲にする



事すら行はれて居る、嘗ては貴人の死すや、來世に於て仕へる爲に多くの僕婢は殉死を敢てしたのである、かく死後尙生命を認める事は地を隔て風俗を異にする民にも共通に存する信仰である。

元始猶太敎に來世の觀念が無かつたとは屢々證明せられ近くはヘッケル等の稱へる所であるがルナンの云つた樣に少くともヒブルーの民は死後の生命を認めて居つた、來世の觀念と密接の關係ある祖先崇拜の念もあつた事は明かである、イスラエルの民は時と共に益々此念を强めたにちがひない、エゼキエルは神の幻影を認めて神が死者に生命を與ふる事を豫言してゐる、又「地の塵に眠れる多くの民は目覺めなむ或者は永劫の生命を得、或者は永遠の恥と謗とを受けなむ」とはダニエルの言葉である。薫りある花咲き亂れた樂園と、恐ろしき

焔の燃える地獄とは等しくかゝる心の産物であつた、時として彼等は靈が轉つて動物木石に變ずると信じた事もある、かくルナンの云つた樣に猶太敎が來世の觀念を有してそこに神の王國を認めた事は事實である。

之と等しく嘗て儒敎にも何等の來世の信仰、靈魂不滅の觀念が無いとは屢々說かれてゐるが、然し儒敎が著しく祖先崇拜の念を貴ぶ事は人のよく知る處である、彼等が死者に食物衣服又寶物を供へるのを見ても死後の生命を認めて居た事が分る、孔夫子自らも祖先を祭る事を一つの義務と認めて居つた、かの最も合理的な思想を說いた老子も尙不死を信じ、道敎の導奉者には特にこの問題を書いたものが多い。

佛陀は又明かに波羅門の敎をついで輪廻の說を信じた人である、後年の彼が



敎徒は著しく彼岸淨土の思想を强めてゐる、金砂の上に水晶の河流れ、麗はしき蓮開き、妙なる音樂響き日々三度花の雨ふり美はしき鳥囀るとは彼等の畫いた樂園の世界である。

かく死によつて吾々の生命は斷絕するに非ずして永久の他界に入り善き心の者は無限の惠を得、汚れたる心の者は無窮の罰を受くるとの思想は、恐らく宗敎を起す源となり又其敎となつて、人々は其信抑によつて限りなき慰藉を得たのである、かくて又彼等は其祖先を目して彼等を司配する無上の神とし、それに禮拜し希願し、尙進んでは彼等を祭る可き寺院をさへ建てたのである。

この來世の思想が進むにつれて、多くの人は現世を否定し寧ろ他界に入る爲に死を希願する念を起さして居る。フイジー島では、年とつて多くの勞働に堪

へなくなると、子は親に死す可き日の來たのを告げて近親のものが集つて埋葬の用意をする、親は其意を快諾して葬らる可き本人が葬式の列に加はつて墓地迄歩く奇觀を呈する事がある、かゝる例は信念によりて死に對する恐怖の念が極度に無くなつた例と見る可きである、げに幾多の信仰は彼等をして死の恐怖の苦痛より脱却せしめて居る。

然しながら果して、かゝる信仰は死の恐怖を全然消滅せしむる程の力があるのであらうか、單純なる未開の民はかゝる思想に滿足したかも知れぬ、宗教はかゝる要求の爲に更に他の解釋を求めて居つた、現世を否定せんとして起つた佛教は此點に關して最も興味ある教へである、「多くの宗教が不幸なる此現世をも樂しきものにしようと説いたのに反して、佛教は獨り壓世的世界觀をとつて



一切の現象を無常とし、人生を苦界であると云ひ放つたのである、老病死に關して深い悲慘を感銘した佛陀は、彼が長き冥想の後、遂に一切の地上の慾望を放棄する事を説いたのである、かくて涅槃の教理は佛教に離る可からざるものとして吾等人生の歸趣と認められて居る」然し涅槃の意義は多くの學者によつて其解釋を異にして居る、ミュラーによれば何等の空滅の意を含んではゐない、多くの學者も此見解をとつて居るがデビスは之を精靈の平隱神聖を意味すると云ひ、ダールマンは涅槃を慾望を棄捨する意に解してゐる、然し涅槃とは恐らくかゝる意味を有して居るのではない、抑も佛教は波羅門の教理を承けて靈の轉生を説いてゐる口碑に從へば佛陀彼自身の身も嘗ては猿馬蛇等の靈であつて、而してかゝるものに再生する事を彼は最も悲慘な現象と感じて、淨き無慾

なる生涯によつて始めて此苦を脱し得ると考へた。「古き詩の譬へによれば輪廻は恰も太洋に比す可きものである、一瞬毎に變化する波は正に絶えざる再生を意味し、其頂きに生じる泡沫は吾々の肉體に比す可きもので、涅槃は其對岸を意味して居る、かくて此涅槃の境に達した者は再び悲しみある轉生の太洋に沈む事はないのである、從つて涅槃とは再生輪廻の終りを意味するのである、「佛陀遂に逝くや涅槃の境に入り、爲に地震ひ天轟きぬ」とは子弟の語る所である、かゝる場合には涅槃は明かに死と伴なつて居るが、其死とは淨い生涯を送つた聖者の死である、故に彼は一切輪廻の作業を絶滅して大安住に入つたのである。之を要するに佛陀は此人生の不幸を脱せんと欲せば一切の地上の快樂を放棄せざる可からずと說き、かくて淨い生涯を送る時、輪廻の終り來る事を告げ



たのである、然し世移ると共に原始佛敎は失せて一つの宗敎的形式となつて再び來世淨土の念は廣く世に擴まつたのである。

「吾々はかく一切の現世を否定して只來世に於ける生命を希望す可きであらうか、近世の科學に從へば、かゝる見解には何等の合理的理由がない、心理官能特に神經組織の如きは肉體の官能を離れては存在しない、血液の循環が止まつて腦に貧血を起す時吾等は直ちに自覺を失はねばならない、手術の目的でクロ、フォームを用ひた患者は何等の自覺をも有してない、科學が死後尙吾々に自覺ある生涯が續く事を明かに否定してるに對して、宗敎は之を肯定しても其中に何等の合理的解答を見出す事は出來ない、之に反して吾々が自覺を失つて後尙其肉體の或部分が其官能の働きを保持してる場合がある、例へば筋肉纖維の如

きは刺激によつて尙收縮する力を持つてゐる、又白血球、精蟲、卵子の如きは吾等の知覺以外に、獨立の感覺を有して自ら其働きを行ひつゝあるのである。かく肉體を離れた來世の存在は何處にも其確證を見出す事が甚だ困難であり且つ不可能と云はねばならない。かゝる見解を有する科學は云ふ迄もなく前代の宗教思想を甚しく動搖せしめたのである。

宗教は又、此避け難い死に對して人心に慰安を齎さんとしたばかりでなく、又人性の不調和に基く不幸に對しても其の救濟に與つたのである、食物の如き性慾の如き、又疾病に對する治療の如きは古くより宗教の關はつた處である。今尙猶太人の食物はモーゼの法規に從つて居る、申命記第十二章第二十三節に「唯堅く慎みて其血を食はざれ血はこれが生命なればなり汝その生命を肉と共



に食ふ可からず」とある、然し聖書に記された此教べには何等絶對的の根據がない、かゝる宗教的衞生術は今は單に史的事實として興味あるばかりである、宗教が特に性慾問題に强い注意を拂つた事は著しい事である、佛教徒は嚴しい禁慾主義を取つて、婦人に觸れる者は恰も殺人者盜賊と見做された事もある、獨身者の僧侶に多い事は之が爲である、特に基督教が性慾に對する嚴酷な見解は人のよく知る處である。病氣に關して宗教は又古くより種々の方法を說いて居る、多くは病を以て惡魔の發現と見るが故に、之が平癒の爲には樣々な呪ひ又は護符が行はれて居る、かのルーターの如きも病氣は惡魔の如き超人間の行爲と思つてゐた。傳染病の如きは特に人の注意を引いて之を神の怒りと思惟して、神を宥めんが爲に多くの犧牲をすら神檀に捧げたのである、かゝる方法は

今の世に多くは其跡を斷つたが、尙其面影を止めたものがある、かの英のエドワード七世が病むや、彼は一方に於て身を醫師に托すると共に、他方に於ては其平癒を敎會に於て希願せしめて居る。

然しかゝる宗敎的救濟にかゆるに實際に基く科學的方法が今後採用せらるゝ事は明かな事である、「然るに死の問題に關しては科學は價値ないものとせられ宗敎は依然として其思想を保持して居る、併し宗敎家の畫ける樂園の世界が何等理論的根據のない事は明かであり、且つ近世の科學はかゝる思想を否定するのである、然も佛陀が說ける如く一切の現象を汚濁なりとして之を放棄する事によつて今の吾等は滿足し得られるであらうか、人生の問題は宗敎によつて未だ解決せられてないのである、哲學はかくて此人生の大問題を解釋せんとして



起つたのである。

## 二　哲學的解釋

「宗敎と哲學とは同じ母より生れた姉妹である、只前者は超自然的敎示信仰の上に立ち後者は智識的合理的見解を基として居る、來世の存在の信念は尙宗敎の如く、古き哲學が死の問題に對するの解釋としてとつた考である。希臘哲學で之を代表する者はかのプラトーである、彼は其思想を合理的にする爲に一つの假定の許に靈魂不滅論を唱へて居る、彼はピタゴリアの輪廻說に基いて、善惡の行爲に對する再世の酬いを說いて居る、「吾れ等が生命は死を起たしめ、死より生甦らむ」とは彼の云へる處である、プラトーはかゝる思想を基礎として、かの悲壯なソクラテースの死を叙して、彼の哲學を述べたのである、要する

にプラトーの哲學は死の哲學に外ならない、「吾れは死す事を恐れず、そは此生命の後に尙或者の存する事を確信すれば也」とは彼が傳へたソクラテースの言葉であつた。アリストートルはプラトーの思想と異り乍ら、尙合理的精神の不滅を說いて、それを永遠の眞理と考へた、下つてストイックになると啻に個人の靈を認むるのみならず宇宙精神の存在を主張したのである。

然し年と共に哲學界は懷疑の浸入を免れなかつた、來世の存在に對する信仰は漸く宗敎家の手にのみ殘つて之に換ゆる宇宙卽神論の傾向が現はれたのである、セネカは一切の生けるものには死の免る可からざるを說き、かくて失はれたるものは再び造られ、死と生との間に常に宇宙が循環せるを唱へ、遂に吾等は死によつて、かゝる宇宙の意志に合體し淸淨にして光輝ある世界に入る事を



說いてゐる、ストイックの最後の華とも見る可きかのマーカス・アゥレリアスは彼の「冥想錄」に最も多く死の問題を說いて居る、畢竟するに彼の哲學は平和を以て死を待つ事にある、彼は死を以て自然の一法則とし、此法則に從へる人生と調和した生活を送る時、人に始めて幸福が來るのを說いて居る、「しかく死を罵る勿れ、自然の意志に從ひてそれを放棄として受け容れよ」とは彼の言である

ルナンの評した樣に彼は死に勝つた人、死は彼にとつて何等の意味をも有しなかつたのである、かのスピノーザにとつても死は永生の一部で、絕對より出でて、不滅な宇宙の本原に復歸するものであつた、かく哲學は死が避く可からざる宇宙の法則たるを主張して、それによつて宇宙永遠の本原に歸着する事を說いて來たのである。

然し中世に及んで哲學は再び宗教的色彩をおびて、只々宗教の教理を解釋するに留まつた時代に遷つたのである、然し時と共に靈魂不滅に對する信念は其立脚地を失つてカントもフイヒテも、不死の問題を超自然的のものとして、かかる事を知るは人智以上なる事を說いて居る、然し近世に於ても是等と著しく特色を異にして起つた哲學がある、そは卽ち厭世哲學である、厭世の思想が現はれたのは古き昔からである、ソロモンが「空の空なる哉、凡て空の空也」と歌つた事は世人のよく知る處である、然し最も明かに此思想を宣傳し之を教理と迄したものはかの佛教である、佛教の厭世的哲學思想は引いて近世の哲學にも大なる影響を及ぼして居る、のみならず多くの詩人が此世を厭つた聲は、近世文學の重大な部分を形造ると云つてもいゝ、ボルテアーが歌に、



「あはれそも人生の行路と目的とは如何なるものぞ、
そは只癡想と暗黑とのみ、
あはれジユピターよ、吾れ等を造りて
心なき戲れとし給ひぬ」

不平の子、詩人バイロンも此世を毒樹ウバスに譬へて、之が枝よりしたゝる病と死との露に、惱み多い此人生を鋭い言葉もて呪つて居る。世を厭つたレオパルディーは嘗て悲しみの餘り「人生は只苦痛と疲勞とのみ、その中には何者もあらず、世は泥土に外ならず、永へに望を失はしめよ、運命とは只々死を與ふるのみ」と、獨逸の詩人ハイネとレナウが、世を悲しむだ聲の、如何に哀れをこめたるかは人の知る處である、露國の叙情詩の父とも呼ばるゝプシユキン

も人生を嘆いた詩人である、

「價値なき偶然の賜物たる人生よ、
　如何なれば吾れに與へられし……
　そこには吾れにとりて何等の目的なく
　吾が心も吾が靈も、そは凡て空なり」

妙なる筆によつて、此世の果なきを歌へる聲が、如何ばかり人の心を刺したかは想像の外である、近世に於ける自殺者の著しい增加率に、是等の文藝の影響が大なる原因になつてる事は否み難い事實である。

かゝる厭世の思想が近世の文學を飾つたと同時に、之を組織的哲學に構成して堂々として厭世哲學を主張したのはかのショーペンハウエルである、彼に



從へば人生の存在は惡である、抑制せざる慾望は惡の源となつて人生の不幸を形造つて居る、感覺の發達しない動物は人類よりも幸福である、彼等は存在の惡なる事を意識せず又死の恐怖を感じないからである。幸福は人生の目的ではない、此世に樂天の思想が續く限り人生は矛盾の塊である、寧ろ幸福より苦痛を以て人生の目的と考へる方が眞理に近い、一切の運命は苦痛である、人生は涙を以て始まり其行路は悲慘であり其終焉は特に悲劇的である、實に死こそ人生の眞の目標である。ショーペンハウエルは又强く肉體の復活、靈魂の不滅を否定して居る、吾人は前世を知らざる如く末世をも知る事は出來ない、故に不死を祈願する事は恰も大なる誤謬を永遠に慕ふが如きものである、吾等が死とは與へられたる生を奪はるゝ事である、肉體は決して不滅ではない、不滅なものは

只生と死とを起す原理ばかりである、自覺は死と共に終らねばならない、然し其自覺を產んだ原因のみは不死である、其原理とは卽ち形而上學的意義に於ける「意志」である、彼はかくて一切のものを否定して人生の究竟の目的が活きんとする意志を捨てる處にあると說いたのである、彼によれば不幸の連鎖たる此人生を終らしむる死は寧ろ樂しきものでなければならぬ、而して此生活の慾望を放棄したる時人は始めて涅槃空滅の境に入り得るのである、然し自殺は彼の唱導しなかつた所である、そは只個人の死を意味して種屬の死を意味しないからである。

彼の後を追ふて厭世哲學を立てたものはかのハルトマンである、彼はショーペンハウエルの如く存在の眞の目的としての幸福なるものが此世に存しない事



を云ひ吾々の有する三つの妄想を數へて居る、第一は現世に於て幸福が得られると云ふ思想である、然し此世の苦痛は快樂よりも遙かに多い、人を幸にすると云はれる愛すら喜より苦の方が勝つて居る。第二は幸福が來世に於て得られると云ふ考である、然しこは死後尙生命があると云ふ信仰の誤謬に基いて居る、肉體も精神も死と共に消滅する故にかゝる信仰は單に妄想に過ぎない。第三は人生の目的を幸福也と斷ずる所にある、こは又宇宙が發展し進步すと信ずる謬見に基いて居る、未だ嘗て其進步を阻害する大なる惡を絕やす事に成效した事がない、疾病、老衰、慾望、不滿は依然として此世に存するのである。

かくて彼は敎育の進步科學の發達が何等の積極的效果なくして却て人生の重荷を增す事を說いて居る、從つて貧者は富者より、愚者は智者より、感覺の鈍

いものは鋭いものより幸なのである、何となれば文明が複雜になり發達するにつれて妄想は增し從て苦悶は多く悲は喜より增し、知識は人生の不幸の源をなすが故である。ハルトマンはかゝる見解よりして人間が幸福を得る事の不可能なるを斷じ、存在は非存在より劣る事を說いてゐる、かくて人間は凡ての慾望が幻想に過ぎない事を知り、幸福に對する一切の慾を棄てゝ、此世の苦悶より自由となつて、始めて寂滅、涅槃の境に入り得るのである。

同じく此見解をついで別種の決論に出た厭世哲學者がある、彼は卽ちマイレンダー (Mailaender)である、彼に從へばこの宇宙は非存在に向つて進みつゝある、斯る事はエネルギーの總量が漸次に減少する事によつても分る事である、故に吾々が寂滅に對する要求は必ずやいつか果さるゝ時が來ねばならぬ、吾が



地上の生命とは唯死の路にある一時の宿に過ぎない、唯死によつて持ち來さる幸福を味ふ爲に先づ此人生を味ふ必要がある、動物に自己保存の念の强いのは之が爲に外ならない、唯不幸にも人のみは此念と共に强い死の恐怖を持つて居る、然し人生に對する執着が宇宙の眞の目的でない事は明かである、吾等の生命とは、唯其存在の目的が非存在にある事を知らす手段に外ならないのである、死のみが吾等の欲し得べき唯一のものである、此死の希願は宇宙の至る處に現はれて居るが唯有機體の世界には、それが「生を欲する」形を裝ふて居るのである、解說、死、寂滅之が眞の宇宙の叫びである、此叫びを聞くものは喜んで死を欲するに至るのである、かくて自らを殺す時、そこに悲痛なく靜けき平和が現はれるのである。

「人は始め愁ひつゝ遙けき所より死を眺め、恐もて唯慄きなむ、されどいつしか彼は死に近きて其周圍を歩む也、かくて日に〳〵其周圍は少さくなりて、遂に彼は弱き手もて死神を抱きつ、其顏をまともより眺めなむ、あはれかゝる時にこそ平和は來る、靜かなる平和は」とは彼の言葉である、ショーペンハウエル及ハルトマンが此人生を呪ひつゝも尙高齡を樂んだのに反して、哀れなるマイレンダーは僅か、三十五歳を一期に自らを殺して、彼の哲學を實現したのである。

「人生に起り來る種々の苦痛が、悲慘な思想を多くの人心に深く刻んだ事は、かく明かな事實である、然し世にはかゝる思潮に反して立つた人も亦多いのを忘れてはならぬ、「吾等が喜悅悲哀は感情の事にして理性の問題に非ず、而して



人類全般の感情を窺ふ時、そは疑もなく樂天的なり」とは詩人ハンマーリングの言葉である、ノルドーによれば樂天の性は至る處に現はれ花の咲ける鳥の歌へる凡て樂天の聲である、のみならず苦痛も亦必要である、吾々は是によつて多くの不幸を未然に防ぐ事が出來るからである。兎も角吾々が常に幸福を慕ふ事は極めて自然な事である、思想界は人類の知識の最後の聲として厭世主義に滿足する能はずして、更に生死に對する積極的解釋を求めねばならない、此要求によつて起つた哲學は在來の未來に關する思想を棄て、主として汎神論的見解をとつて一般的原理、本體の存在を主張して居る、此思想は又多く文藝上にも現はれて居る、スピノーザの思想に酷似したゲーテも等しき人生觀をとつてゐる。有名なシルレルの句に、

汝は死を恐るゝや、汝は不窮の生命を希へりや、
全てに活きよ、汝去りて久しき後、生命は殘りなむ」

リュッケルトも同じ心を述べて、

「汝個人として存する間は、滅亡は汝を襲ふ可し
あはれ全として汝を感ぜよ、そは不滅なればなり」

かく死の問題が古くより如何に多くの注意を引き、種々の解釋を起したかは限りない程である、然も此千古の疑問は今尚紛々として歸着する處を知らないのである、「近世宗敎」の著者マイエル、ベンファイの次の見解は恐らく近代の死に對する思想を代表したものと云つていゝ、吾等は靈魂不滅の思想を容れる事は出來ない、然し吾人の肉體の一元素も失せざる如く、吾々の靈は如何なる部



分も失はれはしない、個人の活動と全人類の生命とが一致する時に眞の不死があり涅槃がある、此思想を養ひ、此目的の完成の爲に努力する時死の恐怖、空滅の驚愕に打ち勝つ事が出來るのである。

「如上の人生に對する哲學的思想を概括すれば、彼等は在來の宗敎が說いた樣な靈魂不滅及來世の信仰を棄てゝ、之に換ゆるに宇宙に普遍的原理、實體の存する事を以てし、個人をしてかゝる宇宙の意志と合一せしむる處に人生最後の歸趣を認めたのである。然し哀れな人類は此高く朧ろげな思想に安ずる術を知らないで、活ける衆生は今尚死の前に立つて痛ましき不安を懷いて居るのである。」

## 三　老衰に關する科學的研究

### 一　科學と人生

「宇宙人生に對する在來の宗教的哲學的解釋に不滿を懷く者には、實驗と觀察とに基いた科學は大なる力である、近世に於て凡ての問題が科學の範圍内に包含せられつゝある事は明かな趨勢と云はねばならない、只人生の根本問題に關しては科學は之に觸れるの力が無いとは屢々人の唱へる所である、然し眞の科學とは常に人生と密接な關係を有す可きものである。若し信仰なくして吾等が生くる事が出來ないならば、かゝる信仰とはいつか科學によつて生れねばならない、科學の發展とはやがて人生問題の啓發を意味する、在來の宗教及哲學的



思索を離れた此科學的人生觀は又かゝる要求から生じたものである」

前述の如く古くから人心を惱まし最も多く其注意を引いたものは老病死の問題である、王子悉達多が出家して佛一代の大業を起したのも、彼が外遊の折三たび老いたるもの病めるもの死せるものを見たが爲である、彼が人生を厭ひ一切の煩惱の絶滅を希願して涅槃の教へを唱導したのもかゝる人生の苦悶から離脱する方法に外ならない、かく古くからあらゆる宗教が其憂苦に對して救濟の道を講じた事は明かな事である、彼等は病を以て惡業の應報、又は神の忿怒と思惟して、之を宥めんが爲には犧牲を供へ祈禱を獻げて其赦しを乞ふたのである、然し時と共に藥料は用ひられ、古の信徒が病を癒すのに呪又は護符を用ひたのに反して、今や世に誇る可き多くの醫藥が發明せられてある、疾病に對す

る救濟はかくて宗教を離れて科學の手に移つたのである。

此病に對する恐怖は又厭世觀の上に大なる影響がある、佛教の厭世的宗教の基をした一つのものは明かに此疾病である、近世の大なる厭世哲學者ショーペンハウエルは嘗てコレラに慄いてベルリンからフランクフルトに逃げた事がある、彼の思想を繼いだハルトマンも同じく病に對して悲觀的見解をとつて將來に於て益々新しい病氣の增加す可き事を稱へてゐる、然し醫學の發展は彼等の恐怖が徒らに杞憂に止る事を告げて居る、コレラの如き疾病は彼等の思念した樣な空氣の化學的變化によるのではなく、全く黴菌の作用たる事が明かになり、今や血清治療さへ發見せられて之を未然に防ぐ事が出來るのである、若し千八百三十一年に是等の發見があつたら世界の哲學は其方向を變へたかも知れな



い、ショーペンハウエルが傳染病に震へて厭世觀を唱へる必要もなく、ヘーゲルがベルリンの大學で唯心論の講義を中止するにも及ばなかつたからである。

げに十四世紀の頃に黑死病が流行して全歐洲の人口の三分の一を殺した事がある、多くの民は之を以て神の忿怒の發現と見て會堂に集ふて犧牲を獻げ苦打ちさへ行つて此恐ろしき惡病の平癒を希願した、埃國の首府を訪ふ者はグラーベンの街頭に宏大なる石碑を仰がねばならない、こは疫病を治癒した天の攝理を表彰せんが爲に十七世紀に建てられた紀念の碑である、然しかゝる疫病が神の忿怒ではなく、一種の黴菌による事は北里及ェルシン兩氏の科學的研究によつて明かになつたのである、從つてかゝる病氣の犧牲になる事は今日に於て甚だ少なくなつて居る、印度等で疫病の今尙流行するのは一つに彼等が波羅門の

敎理を奉じてかゝる科學的治療を用ひないからである、其他嘗ては抵抗し得なかつた多くの病氣に對して今や醫學は大なる效果を奏して居る、かの實扶的里亞にかゝつて命を奪ふ如き人は、反實扶的里亞血清（Anti-diphtheria Serum）を用ひないの愚によるのである、嘗ては此病にかゝつて五十或は六十パーセントの人は死んでゐるが今や十二或は十四パーセントに減じて居る、加ふるにクロロフォルムやコカイン等が知られてから、手術は甚しく其方法を進めたのである、十九世紀後期に於ける戰爭で、其負傷者の死亡率の甚しく減少した事は全く醫藥と手術との發達によるのである。

かく十九世紀末に於て特に發達した醫學は、厭世的思想の基をし人生を不幸にした疾病に對して、今や大なる救主となりつゝあるのである、然も尙多くの



批評家は醫學が一切の病源を根絶せしむる力の無いのを批難して居る、げに結核病等の治療に對しては醫學は未だ不完全である、然しかゝる病氣や腸窒扶、赤痢の如き傳染病は主として吾々の愚かな不攝養に基く事が多い、又腫瘍、癌腫等は殆ど致命の惡病と認められて居るが、之も其初期に病候が現はれないのが病の重きをなす大原因である、天然痘の如き病毒に對してもバストウールの發見に基いて、エンナーが牛痘を用ひてから人は之を未然に防ぐ事を得るのである、惡性の癌腫に對しては醫學は今尙其性質を詳かにしてないがハナウ、モローの諸氏によつて、それが特種の黴菌による事が漸く知られてある、然も多くの患者が其病勢の甚しく進んだ後に治療を受ける事が、彼等に避け難い死を來す大きな原因である、從つて是等の疾病に對して醫學は決して望を失ふ可きで

はないのである、よし多少の遺漏があるにしても醫學が病に對して齎した功績はかく看過し得ざるものと云はねばならない、今や疾病を治癒して人生の不幸を除くものは、神に捧ぐる犧牲に非ずして醫藥の力である、然も批難の聲は今尙止まない、「醫學は如何にして病疫を癒すかを知つて居る、然し如何なる故に人は老い、かくて死すやを說明する事は出來ない、人生の運命に關しては科學は殆ど無智である」とは多くの人の說く所である。

かゝる批難の聲は十八世紀に於て先づルーソーの口より放たれて居る、「宛ら母が危き刄物を其子の手より取り去る如く、自然は科學を避けて汝を保護せん事を希へり……吾等若し不幸にして學者に生れなば人生は更に其惡しきを增さん」とは彼の言である、かゝる間に科學は倦まざる研究を積んで、過ぐる



一世紀に於て更に紀念す可き程の發達を遂げたのである、然も尙現代に於て鋭く科學の價値を非難する人がある、かのトルストイはかゝる一人である、「凡ての科學は吾等人類の道德的要求を欺くものに外ならず、今日の科學の發達は人類の大部分卽ち勞働者の運命を改進し得ざるのみならず、却て之を惡しきに導きつゝあり、若し科學にして人生の目的人類の幸福の爲に非ずんば、そは怠惰なる娛樂に過ぎざるのみ」と、ブルネティエールも同じ意を述べて「科學は人類の根本に關する問題を解決するを得ず、之をなし得るものは只宗敎のみ」と云つて居る、今尙多くの學者は彼等と等しく科學の究竟問題に對しては何等解釋の力を有してゐない事を唱へて居る。

然し科學とはしかく人生と離れたものであらうか、目的なき人生に彷徨つて

惱みの裡に慰めを求めようと欲する人は、かくて再び宗教と形而上學とに走らねばならない、かく科學から信仰に逃れようとする傾向は、かのトルストイの「我が懺悔」の内によく現はれて居る、「余は凡ての科學の裡に解釋を求めたり、然れども余は何者をも見出す能はざりき、彼は人生の問題に觸るゝ力を有せざれば也、吾等は何が故に活き何が爲に働きつゝありや、人生は死によつて破壞せられざる目的を有せりや、余はかゝる疑問を科學に求めたれども失望を得るのみにして何等の慰安をも得ざりき、かくて遂に余をして此苦悶より救ひたるものは信仰なり、げに信仰は人生を可能ならしむる唯一つもの也、人生の目的とは他になし彼が靈の救濟にあり」と。

かく人智によつて凡てを解き得ざるを知る者は、かくて信仰に最後の隱れ家





を求めたのである、人は漸く智識を厭つて神祕に遁れねばならない、「智多き時吾等に又惱み多し、智增すは卽ち悲しみ增す也」との古きイスラエルの民の嘆きは今尙人に感ずる所である、ハムレットも等しき心を歌ひて、

「かくて良心は凡ての吾等を卑怯ならしむ」

そも果して科學の發達は信仰を打破して只人生に不幸を齎らすのみであらうか、吾等が智を求めるのは宛ら本能によつて自ら火に燒く夕の蟲に比ぶ可きものであらうか、果科學は人生を幸にす可き何者かを告げ得るのであらうか、吾等は今や本論に入つて之に對する明確な答を得ねばならない。

## 二　老衰の原因

吾等は先づ人生に多くの悲哀を齎す老衰に關して科學的研究を試みねばなら

ない、然し現今の之に對する知識は甚だ乏しく只其概論をなし得るばかりである、抑も老衰とは如何なる事を意味するのであらうか、生きとし生ける者に死ある限り老衰は一切の生物にも見らる可き現象である、かの滴蟲（Infsoria）の如く分裂によつて子孫が出來るものすら老の徴候は見られる、此動物が分裂に分裂を重ねて多くの時代を經る時、形が縮少して來るので茲に二つが結合して一つになる現象を起すが、其回春の前は卽ち老衰期とも見る可きである、之と人類とを比較すると彼等には回春があるが人類は死によつて再び起たない、故に一般から云ふと老衰とは再び回春しない狀態をさすのである。下等動物では老衰の徴候は著しくないが高等動物になるにつれて、それが明かになつて、人に至つて最も著しい、然らば科學上其徴候とは如何なるものであらうか、體質精神



共に衰頽して勞働に堪えず、只過去に生活して悲哀を多く感ずるのは一般の老人に見る處である、其體質上最も著しい事は筋肉の固くなる事である、雛鳥の肉の軟かさは年老いた鷄の肉に比す可くもない、之は結締織（Connective tissue）の浸入によるので肝臟腎臟等が凡て硬化（Sclerosis）の狀態になる、換言すれば一般の器官の柔軟組織が削耗して結締織が場所を占めるのである、此の現象で最も多くみられるのは動脈硬化（Arterial sclerosis）である、かの骨化（Ossification）の現象も之と等しく軟骨が硬化するのである、老人に挫骨が多いのも之が爲に外ならない、然らばかゝる硬化の現象を起す力は何であらうか、一言にして云へば高等細胞が衰へて之に換ゆるに結締織を以てする事になる、例へば腦の場合には知識感覺等を司る高等神經細胞が失はれて下等の種類の細胞卽ち腦の結締織

たる神經質膠（Neuroglœa）が之に變るのである、又肝臓なら營養にとつて重大な肝臓細胞（Hepatic cell）が結締織に變るのである、換言すれば老年に於ては高等及下等兩細胞の間に爭鬪があつて、後者の勝利が卽ち老衰を起すのである、而して高等細胞を浸害する働きをするのは卽ち蝕細胞（Phagocytes）である。

抑も蝕細胞は外部から浸入してくる黴菌があるとそこに集中して之を防いだり、次に又溢血の場合其血を吸收したり傷を癒したりする、此蝕細胞は大小二つに分れるので小蝕細胞（Microphags）は主として前者の働きをし、大蝕細胞（Macrophags）は主として後者の働きをする、共に白血球の一部を形造つて、敏捷な動作をして嗅覺を持つて居る、從つて周圍のものを分別して有害なものに逢ふと直ちに攻擊的態度に出るのである、かく彼等は肉體にとつて甚だ緊要な



ものであるが、然し同時に此蝕細胞殊に大蝕細胞が老衰の大きな原因をなして居る、卽ち硬化の現象は多く此大蝕細胞の働きによるので彼等が高等細胞を浸害して結締織を作るのである、解剖によつて此事實は慥かで老衰狀態の動物の神經細胞は此大蝕細胞の著しい浸蝕を見るのである、卽ち研究の結論は老衰とは高等細胞が大蝕細胞によつて蠶蝕される事に起因してゐるのである、多くの學者は其原因を生殖細胞の衰頽に歸して居るが老人にも尙其器能の充分なものがあり、時として老年時に於ける卵子には甚しい蝕細胞の浸害を見る事がある、實驗の結果によれば老人の腦髓は明かに蝕神經細胞（Neuronophags）に襲はれてあり老人の特色たる白髮は又明かに蝕色素細胞（Chromophags）の作用によつて居る、又筋肉の硬化も之と同じで骨化の現象も蝕骨細胞（Osteoclasts）の働きに

よつて居る、即ち老衰とは在來の思想によれば生理的必然のものと見られて居るが寧ろ病理的不自然のものと見ねばならない、之は最も注意す可き所で、換言すればかゝる病理的現象を受けないものは年老いて尙健全な器官を備へ、從つて精神の健康も保たれ更に長命を得べき筈である、故に老衰を防がんとするなら、其原因たる下等細胞の群集力を弱め高等細胞の働きを強める事にある。

然も尙老衰が病理的である事は他の主な原因によつても知られる、かの硬化の現象の如きは蝕細胞の浸害による外に大きな原因となるものがある、即ち動脈硬化は主として酒精中毒及梅毒によるものが多い、之は實驗によつても知られる事で例へばニコチンの如きものを注射すると硬化を來すので、即ち此慢性的炎症は主として黴菌によるのである、酒色の巷に耽る事はやがて老衰を早め



る大きな原因である、梅毒に犯された幼兒が往々老人の容貌をしてるのも之が爲である、かの痿痲窒斯(Rheumatism)の如きは硬化にとつては第二の原因に過ぎない。

次に吾人の生命を短くし老衰を早める最も大きな原因は大腸内の黴菌である、此大なる消化器が吾人に必ずしも必要でない事は前述の如くであるが却て之が吾人の生命の長短に大關係を持つてゐるのである、シュトラスブルガーの研究によれば大腸内の黴菌は日に一二八、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇の度を以て繁殖する、此大腸には多くの排泄物を宿すが故に黴菌の發生にとつて甚しい好狀態にある、かゝる莫大な黴菌が吾人の健康にとつて有益な筈がない、幾多の人は之が爲に病理的死亡の犧牲になつてゐる、營養上から云つても此大腸

は大した必要がないのである、ッエルニーの研究によれば、此器官が二十四時間内に吸收する液は六グラムより多くはない、之は營養上から云つて甚だ僅かなもので、唯大腸は粘液を分泌して固體の排泄物を潤ふす位が其務めである、事實によれば大腸なくして生きてる人も往々ある。

人生にとつてかゝる不調和な大腸が何故に吾人に與へられたのであらうか、大腸は哺乳動物に於て特に發達して居るが、それには必要ある原因が無ければならない、抑も彼等は野生の生活を營むが故に敵を追ひ又は敵に襲はれる場合には早い運動が必要である、かゝる敏速な運動は彼等の間には屢々起る事であり其遲速はやがて彼等の生命に大きな關係がある、然るに彼等が排泄物を出す場合は停止するか若しくは靜かに歩む場合に限つて居る、從つて迅速な運動が



屢々起つてくる彼等は、其運動の際には糞便の遑がない、之が爲には暫時此排泄物を體内に留めておく必要がある、彼等に大腸が非常に發達したのは此要求を滿す爲なのである、鳥類は飛翔中にも糞便し得る故に何等かゝる發達した大腸を持つて居ない、蟲類、兩棲類の動物も所謂冷血動物たるが故に食料も少なく且つ運動が遲鈍であるから哺乳類の樣な大腸を持つて居ない、人間にかゝる大腸の與へられた事は唯哺乳動物の後裔たるが故である、然るに人は彼等より遙かに發達した頭腦を持てるが故に、彼等の樣な生存の爭鬪を必要としない、從つて敏速な運動を要しない吾々には、大腸は既に緊要な器官ではないのである、然るに排泄物の留滯によつて黴菌を釀す此大腸あるが爲に吾々の生命は短くせられ不自然な死を遂げてゐるのである、從つて大腸の存在と生命の長短と

には注意す可き關係がある。

哺乳動物が發達した大腸を持つて居るのに鳥類には之がない、然るに一般に鳥類は哺乳動物より長命である、此事實は大腸と生命期との間に密な關係がある事を暗示して居る、金絲雀や雲雀の樣な小鳥でも二十年以上活きる例があり、鸚鵡は通例最も短かい年齡が十五歳で長年のものは凡そ八十歳に迄達する、鷹には百歳以上のものが知られてある、然るに哺乳動物になると、例へば馬の生命期は凡そ十五歳から三十歳で、羊は十二三歳を止りとし犬は凡そ十五歳で猫は長くて十二三歳である、兎は十歳位で鼠は五六年の壽より保たない、もとより象等は長命であるが概して鳥類は動物より長壽を保つと云ふ事が云へる、而して其大原因となるものは大腸の有無である、反芻動物が殊に生命の短



い事はよく之を證明して居る、彼等の發達した大腸が腐敗物を其中に宿して、多くの黴菌を生ぜしめる事は、やがて彼等の生命を短くする原因なのである、此不調和な大腸や盲腸を必要としてい鳥類は幸にして黴菌の侵害が少ない爲に長命を保つのである、此事實は例外の場合によつても知られる、鳥類で飛躍せずに獸類の樣な生活を送るものがあれば前述の法則に從つて大腸が發達し從つて短命な鳥である筈である、實例によれば走禽類たる駝鳥は其好適例である、彼は大軀を有し强壯な鳥たるに拘はらず通例の生命は凡そ二十年位である、解剖の結果によれば駝鳥の大腸と盲腸とは著しく黴菌に犯されて居る、之を鸚鵡の如き小鳥が八十年百年の生命を保つのに比べれば其理は明かである、然も若し獸類中に鳥類の如き生活をするものがあるなら、以上の理によつて長壽を保つ

可き筈である、蝙蝠は又其例にもれない、彼は飛ぶ事が出る故に他の獸類の如くに發達した大腸をもつて居ない、從つて其中の黴菌は極めて少ない、此小さな動物はかくて十五歳以上の生命を續けてゐるのである。

以上の事實に從へば大腸内の黴菌は老衰にとつて大きな原因をなすものである、人類は動物中長い生命を保つてるものであるが、若し幸にして大腸がなかつたら更に高齢を保ち得るにちがひない、卽ち人の生命は生理的なのでなく病理的である、人は本然の壽を保てるに非ずして、人性に存する多くの不調和の爲に不自然なる一生を送るのである、かゝる事が原因をなして吾々には悲慘な不順な疾病、老衰、死亡の現象が與へられてある、此事實はやがて幾多の時代の人々をして、生命を呪はしめ世を厭はしめ人生を不幸にした原因である、然



も病理的な現象とは卽ち治療の可能を意味するものである、吾人をして厭世思想から樂天思想に導く事は此人性の研究より可能たる可き事と云はねばならない、かくて科學が人類の長かりし憂苦を癒して人生に幸福を齎し得べき事は不可能ではないのである。

## 三　動物の年齢

自己保存の念の强い吾々は早くから生命の期限を顧慮した、先づ凡ての動物の年齢期に何か法則の潛む事を考へたのである、多くは其形の大小によつて生命の長短を推測したが之はもとより正確を缺いてゐる、古くバフォンの考へによれば動物の生命は生長期の六乃至七倍であるとした、卽ち人では十四歳の時が先づ生長する時期故之に六又は七倍すれば卽ち九十乃至百歳である、又馬の

生長期は四歳頃故其生命は凡そ二十五又は三十歳位となる、フローレンスは之に反して生長の制限期に五倍したものが動物の壽命だとした、即ち人は凡そ二十歳の時が生長する制限故之に五倍したもの即ち百歳が人の受く可き生命と見た駱駝は八歳の時全く生長しきる故四十歳の齡を保つわけである、馬はかくて二十五歳だと結論して居る、然し此說はもとより不充分である、例へば鸚鵡の如きは生長力が甚だ早いに拘はらず非常な長命である、然るに鼠の如きは全く之に反してゐる、又ブンゲは別の法則を求めて居るが、彼に從へば出生後體重が二倍するのに要する日數はやがて其動物の生命の長短に關係して居る、人は百八十日、馬は六十日、牛は四十七日である事は、やがて此三つの動物の生命の長さを示して居る、然し此說も例外が甚だ多い、例へば馬は犬に比して生れて後



重量を二倍するには七倍の日數を要するのは其生命は三倍より多くはない、かく是等の說には誤謬があるがワイズマンは、動物の生命は單にそのものゝ生理上より來るのでなく外界の影響がある事を主張した、換言すれば自然淘汰に關係があるとした、凡ての生物は子孫を傳へる爲に生殖力を持つて居るが、それは種によつて甚だ異なつて居る、研究の結果によれば出產力の少ないものは生命が長い、例へば概して鳥類は卵を產む事が甚だ少ない、從つて彼等は多くの子孫を作る爲には長く生活せねばならない、此自然上の必要が彼等の生命を長くして居る、然るに鼠や兎等の出產力は强い故に彼等はしかく長命する必要がない、從つて短命なのである、然し此說にも例外が甚だ多い、例へば鴨の如きは或地方のものは日に必ず一つの卵を產むに拘はらず甚だ長命である、然も出

産後に於ける母體が衰弱する事は事實であるが雌が雄よりも長命な場合は往々ある、又多産の動物は子孫が外界から受ける障害を償ふ爲であると說かれて居るが、出産力又は子孫の死亡數と親の生命期とに關係があると見るのは誤りで、寧ろ動物の年齢は其生理的過程を顧みる可きである、オスタレーは食物と生命とに關係があるのを說いたが之も一面の眞理より含んで居ない。

以上の諸說は多少の眞理を傳へてるかも知れないが吾々は生命の長短に關して他の主な原因を求めねばならない、そは卽ち前述の大腸と生命期との關係である、事實によれば大腸の甚しく發達してゐるのは全く哺乳類のみで魚類では之が消化器としては別に重要な位置を占めて居ず又兩棲類爬蟲類では盲腸と共にやゝ發達はしてゐるが鳥類になると短く且つ不完成で盲腸の無いのが普通で



ある、之が全く哺乳動物の生命を短くしてゐる大原因である、卽ち大腸內に滯在する排泄物から生ずる黴菌が大腸の壁に吸收せられて、往々にしてそれが吾吾の致命傷となるのである、祕結の際に肝臟腎臟の病を起し易く所謂自家中毒の現象を起すのも是等の黴菌の働きに外ならない、此不調和な器官はやがて人間が本然に受く可き生命を遙かに短縮して病理的な死を遂げしめる原因になつてゐるのである、幸にして鳥類はかゝる器官から受ける障害が少ない爲に長壽を保ち、駝鳥の如きは鳥として獸類の樣な生活を營む故に短命を免かれないのである。

抑も動物は如何なる年齢を得てゐるのであらうか、種の異なるにつれて樣々である、非常に單純な器官を持つてゐるものでも甚だ長命なものがある、例へば

磯巾着の一種で(*Actinia mesembryanthemum*)六十六年活きたものがある、此種の動物は然も生長が早く且つ繁殖力も強いのである、昆蟲の類では僅か一ヶ月より生命のないものもあるが或蟬の類では(*Cicada Septemdecium*)幼蟲で十六七年活きてゐるものがある、魚類では殊に長命なものがあつて鯉で百五十の齢を保つた實例がある、かのフォンテムブローの池に居る鯉は數世紀活きてるとさへ云はれて居る、又梭魚(カマス)は非常に長命でゲスネルの記錄によれば千二百三十年に捕つたもので其後二百六十七年間活きてたと傳へられて居る、又爬蟲類も長命で龜で二百年の齢を得てるものは往々にある、かゝる冷血動物の長命なのは主として生理作用の遲いのに基いて居るのである、鳥類と哺乳類との年齢は前述の如くであるが次に注意す可きは人間の生命期である。



バフォンやフローレンスの見解によれば人間は百歳の壽を保ち得るとしてある、然し實際に於て人が此年齢に達する事は甚だ稀である、統計の示す處によれば人類の死亡數の多くは幼年時に於てゞある、出生後一年間で死ぬものだけで其四分の一を占めて居る、青年に及んでは甚だ少なく老年に於て再び其率を増して六十歳と七十歳の間の死亡率が次に最も高いのである、然し人間が此年齢に限られてゐるとはもとより云へない、エブシュタインの結論によれば七十五歳以前の死を早死だとして居る、哲學者に於けるプラトーの如き、詩人に於けるゲーテ、ユーゴーの如き、藝術家に於けるミケランゼロ、ティティアンの如き何れも此高齢を越えて偉大な事業をした人々である、然し多くの人は疾病災禍の犧牲になつて自然の死を受ける事は非常に稀である、然も一方には百歳の齢

に達する人は往々に見る處である、佛蘭西では一年間に百歳を越えた人で死ぬ者が凡そ百五十人あると云ふ、希臘では殊に多く統計によると其九倍を示して居る、昔の聖典には非常な高齢に達した例があるが、それは不正確にせよ歴史は色々の實例を傳へて居る、かのグラスゴーの寺院の創立者ケンティガーンは百八十五歳迄活きたと云はれてゐる、又北國の老翁と呼ばれてるドゥラッケムベルグは千七百七十七年に百四十六歳で死んで居る、又嘗て農父だつたバールは凡そ百三十歳迄は勞働を續けて、死んだのは百五十二歳の時であつた、かのハーベー自らは其死體を檢査したが別に病氣に犯された徴候も無かつたと云ふ、かく百五十歳の齢を保つた人はあつても甚だ稀であらうが百歳から百二十歳位の人は稀ではない、一般から云ふと男より女に其實例が多く、希臘で千八百八十



五年に調査した處によると二百萬近い人口に百歳以上の人が二百七十八人あつた、其中百三十三人が男で百四十五人は女だつたと云ふ、茲に注意す可きはかゝる事が宛ら遺傳でもする樣に一家族中に起る事が往々ある、前述のバールに一人の子があつたが彼も百二十七迄活きてゐた、之には遺傳と共に氣候、習慣、食物等も關係して居る、バルカン半島やロシアの人口は稀薄であるが西歐洲よりかゝる長命の人が多い、又概して贅澤な生活を送る人より粗野な生活の人に長壽を得る人が多い、換言すれば健全な體格と質素な生活とは高齢を得るのに適してゐると見ていゝのである。

かく人間は多くの人が受ける生命より遙かに長い齢を保つ可能性を有して居る、然るに人は不調和な性を有してゐる爲に不自然な死を遂げねばならない、

かの老衰の如きも殆ど生理的でなく病理的なのである、若し吾々にして幸に生理的自然死を遂げる事が出來たら、かゝる死はずつと老年に於て來る筈である、然も病理的でない爲にそこには老後に於ける悲哀もなく、死に對する恐怖もないわけである、今の吾々の生活は甚しく不順と云はねばならない、吾々は果してかゝる自然の死を得る事は出來ないのであらうか、死の研究は合せて此問題を解く可き鍵鑰である。

## 四　死に關する科學的研究

### 一　死の研究

死とは何であるか、千古の疑問として人は今尙其前に迷ひ其前に怖れを懷い



て居る、宗教、哲學の權威が墜ちた今日、科學は如何なる點迄之を解き得るのであらうか、生あるものに死が免れないとは人々の信ずる處である、然し下等動物には違例がある、滴蟲や他の原蟲は單純な分離によつて子孫を造るので是等の極微動物には屍がない、ワイズマン等が「單細胞有機體の不死」と云つたのは之である、只ゲッテの云つた樣に個體が失はれて子の體に分たれる時は、所謂個體の自然死と見ていゝ、若し分たれずに死ぬものがあつたらそは全く不慮の死である、單細胞動物の不死は凡ての學者から承認せられて居るが之以外の生物はに何れも個體の死がある、然し多くの細胞によつて組織せられてゐる彼等生物には不死の細胞をも含んで居る事を忘れてはならない、そは卽ち生殖に關する細胞である、女性に於ける卵子と男性に於ける精蟲とはやがて子孫を永遠

に持續す可き要素である、もとより彼等の大部分は死ぬが彼等の死は決して自然死ではなく横死である、科學は卽ち吾人の肉體に不死の分子を含んで居る事を敎へて居る、のみならずかゝる生殖細胞は各々感覺を有して居る、從つて不死なる彼等細胞に又精神の不滅を認めねばならない、ヘッケルが「細胞精神」と云つたのは卽ちそれで原蟲類はかなり發達した感覺を持つて居て、食物を擇び異性を認め危險を避けるが如き働きを行つて居る、かく吾々の肉體は生殖細胞に於て不死のものを持つて居るが、然し之は吾々が所謂意識現象とは何等の關係もない、生殖細胞の感覺的行動や蝕細胞の活動等は全然吾々の意識には登つてこない、換言すればかゝる細胞精神の不死と、所謂吾々の靈魂不滅の問題とは別である、研究の結果によればかく生殖細胞のみは不死であるが他の細胞卽



ち非生殖細胞は必然死を免かれない、只非生殖細胞中に復生（Regeneration）の性を含んでゐるものには不死の性を否む事は出來ない、海月、蟹、蟹蝦等は其例で、彼等は或部分を切られても復生の能力を持つて居る、然し高等動物には殆ど此力を缺いて彼等の體は明かに生殖細胞と非生殖細胞とに區別された二種より成つて居る、卽ち腦髓等の高等細胞は全く生殖能力を缺いて居る、換言すれば高等な精神的能力を有すれば有する程其細胞は生殖の能力を失つて居る、一面より云へば彼等は不死の生殖細胞ならざるが故に所詮死を免れないのである、最も純な死は高等な細胞卽ち腦の神經を形造る細胞に存するわけである、在來の人が肉體は死す可きものと考へたのは誤りで、そこには不死のものが含まれて居り、之に反して不滅な精神作用を營むと考へられた頭腦を形造るもの

等には凡て自然死があるのである。

然し凡ての生物の死は殆ど横死(Violent death)で自然死(Natural death)は非常に稀である、然しかの蜉蝣の死は自然死のよい例と見ていゝ、夏の夕群をなしてゐる此の弱い蟲は、其生命の短いのを以て古くから知られて居る、然し其幼蟲は水の中に住んで敏活な運動を營んで二三年をそこに送つた後に羽化して所謂蜉蝣となるのである、然し幼蟲で長活きであり活潑である此昆蟲は成蟲としては甚だ虚弱で僅か一二時間で多くは水に落ちて死んで了ふ、之は全く其成蟲の體質に起因して短命なのである、幼蟲は強い顎を持つて居て食物の咀嚼には甚だ適して居るが、成蟲は只其跡跡を止めてゐるのみで從つて彼等は食をとる事が出來ない、之が全く其生命の短い原因で、彼等蜉蝣の短かい生涯は全く愛



の爲にのみ捧げられるのである、羽化するや異性を求めて其生殖作用が終ると、彼等には既に死す可き運命が與へられてゐるのである、即ち明かに彼等は自然死を受ける樣に作られて居る、彼等には食物がないのではない、又周圍が其生活に適して居ないのでもない、只彼等には生命を持續する機能が與へられて居ないのである、彼等の死には何等他の昆蟲に見るが如き病理的原因がない、即ち其死體を檢しても何等の黴菌もなく又彼等は多くの蝕細胞を持つに拘はらず其浸蝕を何處にも受けて居ない、即ち神經組織も筋肉も他の器官も凡て常態を保持して居る、此實例は人が蝕細胞の浸入より免かれ得る可能をも示すもので又一面には自然死には何等の悲哀ある衰頽をも伴はない事を示して居る。

此自然死の現象は吾人の最も注意を價する問題である、蜉蝣の死は既に彼等

が性慾の滿足せられつゝある愛の中に始まると見ていゝ、彼等の死に對する感情の研究は興味あるものと云はねばならない、第一に著しい事實は、彼等を捕へる事が易々たる事である、他の昆蟲を捕へる事はしかく容易でないが、蜉蝣は發達した羽を持ち鋭い眼を持つてゐるに拘はらず、捕獲されても何等の抵抗をも試みない、之に反して其幼蟲は甚だ敏活で捕へる事は容易でない、一言にして云へば幼蟲に於ては自己保存の念が甚だ強いのに、成蟲に於ては殆ど其本能が失はれて居る、此事實はやがて自然死なるものが必ず自己保存の本能を失ふ事を伴なうのを意味してはゐまいか、換言すれば自然死とは死の本能を伴なうものではあるまいか、之は最も重大な事柄である。

如上の議論より考へる時、不死なものは生殖細胞のみで非生殖細胞即ち高等



細胞には自然死がある、かくて最も發達した高等細胞を有する人類は、從つて自然死が來る可き最も多くの可能性を有してゐる、然るに人には蜉蝣に見られる樣な自然死がある事は甚だ稀である、彼等は蝕細胞の侵害により酒精中毒又は梅毒の犧牲になり、或は大腸内の微菌に犯され其他多くの疾病災禍の爲に天壽を完ふせずして横死を遂げて居る、即ち人間の老衰と死とは殆ど生理的な自然なものではなく病理的であり不自然である、人間の齡が生理的に如何程迄達し得られるかは前章に論じた處である、而して人が此完全な生理生活を終える時に自然死は來るのである、かの與へられた運命を完ふして何等死の恐怖なく自然死を遂げる蜉蝣の生涯は、之を證す可きよき比論と云はねばならない、高齡の人が將に死ぬ時、靜なる死の來るを悦んで宛ら眠りを本能によつて欲するが

如くに、平和の裡に永眠の境に入る事は往々にして吾々の見る所である、死の本能が來るとは自己保存の念の強い吾々には奇なるが如く思へる、然し本能の變化が可能なる事は實例の示す處である、母の幼兒に對する愛情は一切の動物に存する強い本能であるが、兒が成長して獨立するに及んで此情は失はれ時として嫌惡の情を起す事すらある、然るに次の兒が生れるや再び愛情は其子の上に注がれる、之は本能の周期的現象と見ていゝ、幼兒は又母の乳を本能的に慕ふ習性があるが、彼等が他の食物を取る樣になると全く此本能を失ひ且つ嫌ふ樣になる、之は明かに本能の變化の一例である、從つて自己保存の本能に換ゆるに死の本能が現はるゝ事は不可能とは云へない。

かゝる死の本能、自然死とは吾々が人性の根底に與へられたる本然の性であ



る。只、今の文明今の境遇は此天賦の性を甚しく傷けて居るのである、不幸にして人性は多くの不調和な性を有するが爲に病理的老死を遂げ最後の平和な歸趣に到達せずして悲慘な死の恐怖を懷いて逝くのである、然も多くの若い人は此人生の至樂の一階段を踏み始めるの遑もなくして生命を終へるのである、げに今の人生は哀れなる不順の狀態にあると云はねばならない、之が今の文明に人生に一切の矛盾葛藤を起す原因なのである、只科學が本然なる人生の根底に祝福す可き性の與へられてゐる事を告げて居るのを忘れてはならない。

## 二　自然死

今や吾人は此人生觀を歸決す可き死の問題を更に細論せねばならない、然し科學が人生の根本問題に觸れたのはまだ新しい事である、從つて死に關する科

學的知識の未だ不充分なのは免かれないのである。

茲に自然死と云ふのは或有機體の內部に潛む性を云ふので何等外部からの影響による死を意味するのではない、生物の死が殆ど横死である爲に、自然死の存在を否定する人もある、又理論上より云へば生物は永遠に代謝機能を營む故に其生命も永遠たる可きであると云はれるかも知れない、げに滴蟲の如く分離によるものに死はなく、又巨大な樹木の生命も限りない樣に見える、其死ぬのも殆ど災禍によるので彼等には自然死がない樣に思へる、カナリー島にあつた麒麟竭樹（Dragon tree）は四五千年を經てゐると云はれて其地方の神として祭られて居る、然し此魁怪も千八百六十八年の嵐で遂に斃れて了つた、ケープ・ヴァードの木綿（Baobab）は更に著しい例で直徑三十フィートもあるが、アダン



ソンの研究によれば五千百五十年の齡であると云はれて居る、多くの學者によれば、かゝる巨木には元來死がなく只外界の障害で枯凋するのだと云はれて居る、然し植物界に自然死がある事は明かで下等な穩花植物にも又高等の短命な植物にも此現象がある事は事實である、所謂一年草は種を結べば自ら枯れねばならない、只人工的に授胎作用を無效にすると一二年其生命を延長する事が出來る、芝を花が咲く前に刈つて其綠を長く保たせるのは之を應用したものである、種を結ぶ事によつて彼等植物が枯れる可き運命を持つてゐるのは全く疲盡（Exhaustion）によるのだと云はれて居る、此說は多くの學者によつて說かれて居るが、豐沃な土地に生えて、然も多くの細胞が全く其精力の盡きてない內に枯れるのは矛盾ある事と云はねばならない、故に彼等の死を何か內部原因に求

めねばならない、或人はそれを以て先天的宿命として説明してゐる、即ち花開き實を結んで其生殖作用を終えるや、其宿命として死が來るのだと説くのである然し是等の見解は共に不完全である、吾々は更に疲盡宿命を起す原因を知らねばならない、何かそこには他の複雜な有機的過程が存するにちがひない、即ち人工的に其生命を延長し得る事から見ても其内部に何か特別の性質があると見る可きである。

最も下等の植物たる黴菌に就ては多くの現象が攻究せられてあるが、パストールは乳酸菌に就て特に秀でた研究をして居る、今砂糖から乳酸を醗酵させると、其乳酸菌を生ずる爲に砂糖が未だ充分な營養となつてゐるのに、途中で其黴菌が醗酵を止めるのみならず、却て自ら其菌が死ぬ事がある、之は全く乳酸



菌自らより起す自家中毒(Auto-intoxication)による事が分つたのである、從つて外界から其作用を防止すれば充分な醗酵を得る事が出來るのである、此事實は丁度人工的に一年草の生命を延長する事が出來る事と相呼應しはすまいか、即ち彼等植物の自然死は疲盡や宿命によるのではなく、更に複雜な内部の過程即ち自家中毒の現象によると假定する事は出來まいか、よし高等植物の死の原因に就ては之が單なる假説にせよ黴菌に就ては確説として承認せられて居るのである。

植物界から動物界に移ると更に複雜である、動物には其自然死が全く直接に其構造自身に起因してゐるものがある、かゝるものには時として暴虐による自然死がある、海面に居て簡單な構造を持つてゐる *Plitidium* と云ふ蟲が居る、或時

期になると胎兒が其胃の傍らに出來るが遂にはそれを圍んで烈しい筋肉の收縮によつて其胃を分離さして了ふ。つまり子は親の胃を奪つて獨立するのである從て親は消化器を失ふから幾何もなくして死なねばならない、之は暴虐による死ではあるが自己の構造習性による故に横死でなく自然死と見ねばならない、又同じ類の或蟲の幼蟲は母體内に發育するので外に出る時は必ず母の體を破つて出ねばならない、母は此爲に去け難い暴虐による自然死を遂げるのである、然しかゝる例はもとより多くはない、只生命を長らへるのに不適當な構造を持つたものが居る、擔輪類(Rotifera)の蟲で或雄は消化器を缺いてゐる爲に他の器官が發達して居るに拘はらず僅か三日より活きて居ない、之は動物中最も短命なものと見ていゝ、かゝる内部の構造からくる自然死の例は尚いくらもあるが、



高等動物になると自然死の現象は非常に稀で多くは疾病災禍によつて天命を完ふしないで横死を遂げてゐる。

もとより人類に完全な自然死がある事は稀であるが、往々にして高齢の人の死は自然死と見なされて居る、而して彼等の死は營養の不足や生殖力の疲盡によるのではなく恐らくは自家中毒の現象によるのである、之を證明する爲に自然死と睡眠との比較は興味ある事である、睡眠が何等かの中毒による事は信じられてゐるが、プライエルの説によれば凡ての器官の活動は *Ponogenes* ならる物質を造るが、之が疲勞の感覺を起すので覺醒中は集つてゐるが睡眠の時には酸化作用で之が散布する、其物質の重要なものは酸で之が痲醉性を持つてゐる事をとなへた。又エレラの説によれば *Leucomaines* と云ふ亞爾加里があつて之が

神經中樞に影響して疲勞睡眠を起すのであると主張した、然し是等の說は未だ不充分でかゝる物質が如何なるものであるかと云ふ事は不分明である、近來 *Adrenaline* の研究があつて之の少量が睡眠を起す事はツァイガンが實驗して居る、然し最近に於て此研究に最も效があつたのはワイヒァルトの研究である、彼は酸や亞爾加里の樣な物質の存在を否定して、睡眠は寧ろ病原的黴菌の有毒性生成物(The toxic products of pathogenic bacteria)に基く事を出張した、換言すれば特種の黴菌より起る自家中毒によつて疲勞の感を起すのである、彼は實驗によつて之が證明を試みて居る、かく睡眠が自家中毒によつて起る事はかの睡眠症の研究によつて益々確かめられて居る、此病氣が極微の寄生蟲(*Trypanosoma gambiense*)に原因してゐる事は知られて居るが卽ち疑もなく此寄生物から發せ



られる毒によつて中毒せられるのである、クラパレーデは此中毒說に反して本能說を主張したが兩者は矛盾するものではなく兩面の眞理を傳へて居るのである、かく睡眠の自家中毒による說は、自然研究にとつて最も注意す可きものである、卽ち自家中毒の現象によつて本能的に人が睡眠を欲する如く、吾々は等しき過程によつて死の本能を起し自然死に入るのではあるまいか、實例に於てかゝる現象は屢々報じられてある。

トカルスキーの擧げた例によると、非常に年老いた一人の夫人があつたが、嘗て其孫が最後の贈物として美酒を口にすゝめた時、彼女はいたく其厚情を謝して、若し人が彼女の樣な齡になつたなら、宛ら眠りを欲する如く死を欲する樣になる事を告げたと云ふ、彼女はかくて半時を經ずして安らかな永眠に入つ

たのである、之は自然死の本能の發露した一例と見ていゝ、然も眠に着く時人人が快感を覺える如く、死の本能が吾々に更に多き快感を與ふ可き事は自然の事である、何等の疾病なく恐怖なく、完全な生理的生涯の終焉に、新しき此死の本能が、吾人に平和なる靜穩なる感情を起す事は明かな事と云はねばならない。

人性に存する多くの不調和を除いてかく完全な天壽を完ふする時、そこには自己保存の本能に換ゆるに自然死の本能が現はれ吾々は安らかなる永眠に入るのである、死の本能の前には一切の恐怖も不安もない、宛ら眠るが如き自然の死こそ人生最後の歸趣である、此本能の前には凡ての人生の憂苦矛盾は跪かねばならない、吾等の人性に此祝福ある終局が與へられてゐる事を知るのは、や



がて哀れなる厭世の思想を去つて悅ばしい樂天の生涯に入り得る所以である、吾々が樂園と云ひ涅槃と云ひ、凡て此與へられたる人性の根底に見出し得るのである、人生とは其本然の性に於て樂天的たる可きものである、只之を不順せしめたるのは多くの原因があるからである、從つて今や吾人のなす可き務は、かゝる障害を人性より除去する事にある。

## 三　生命の延長

今の吾々は祝福す可き天賦の人性を毀損して、自ら人を呪ひ世を厭ふの愚をなして居るのである、若し吾々が與へられた自然死の安住に入らうとするならば、即ち不自然な老衰死亡の原因を除かねばならない、換言すれば天壽を完ふする爲に吾々は生命の延長を計らねばならない、かゝる事は失はれたる人性の

幸福を挽回す可き重大な方策である。

自己保存の念の強い吾々は古くから生命の延長に對する方法を求めて居つた、ダビテ王が年老いた時、其使臣が彼に處女と伴ふ可き事を勸めたのも若い心に慰らす爲であつた、後世此事を Gerokomy (老養)と呼んで希臘羅馬の人には多く信じられて居つたのである、コハウゼンの傳ふる處によればヘルミプスが百十五歳の齡を保つたのは全く彼が長い間少女の學校の先生だつたからだと云ふ、又人が長命の藥料を求めた事はよく知られてある、老子と其子弟は不死の長命液を求めた、龜を祭る風習も命を長らへんとの希である、やゝ其方法が醫學的となるにつれて衞生術を試みたものもある、生理學者ブラウン・セクゥードは人の衰頽は睪丸の分泌液の減少に基くとして、他の動物の睪丸より得た乳劑



を皮下注射した、又多くの科學者はスペルミンとして知られてる亞爾加里性の鹽を用ひて功を奏して居る、かゝる醫藥を用ひる外に充分な睡眠、入浴、運動、規則ある生活等が健康を齎らす事はよく知られてある、げにかゝる衞生は吾人の生命を延長する力がある、近世に於て死亡率の減少したのも全く醫學の發達に基いて居る、かの種痘の如きは慥に幾多の人の生命を救つてゐると云ふ事が出來るのである、然し吾々は根本的に吾人を短命にする病原と戰はねばならない、老衰を起す多くの原因を消滅せしむる事はやがて吾人の生命を延長し天然の壽を保たしむる所以である。

多くの疾病中最も痛ましいものは梅毒である、古來幾萬の人が此犧牲になつたか知れない、かの不具者を作る事も、癌腫を起す事も、動脈硬化を來す事も

多くは此働きによるのである、梅毒のなかつた時代と現今とは人の生命に大きな差違があつたにちがひない、吾々は先づ天賦の人性を傷けない爲に此病原と戰はねばならない、又酒精中毒に對する豫防はやがて悲しき老衰を止める所以である。

次に老衰の大原因となるものは蝕細胞によつて高等細胞が侵害を受ける事である、從つて蝕細胞の集中を解散さす事はやがて老衰を早めない所以である、然し一方に於て蝕細胞は外來の有毒性微菌を撲滅する上に於て缺く可からざるものであるから蝕細胞を斃すより寧ろ高等細胞の力を强固にする方法をとる可きである、之には血清の療法がある、一動物の血又は血清は主として他の動物の體にとつては有毒のものである、馬や羊は其毒の少ないのを以て知られて居



るが、他の動物の血清を注入して得た彼等の血清は有毒性のものとなるのである、兎の血清を羊に注射して得た兎羊血清は兎の血には有毒である、兩者の間に沈澱物が起るのは之を示すもので即ち兎の赤血球を熔解するからである、換言すれば甲の動物の血清を乙の動物に注射して得た甲乙血清は前者卽ち甲に對しては有毒のものとなるのである、此性質よりして例へば實扶的里亞の黴菌を注射して得た或動物の血清は、實扶的利亞菌に對しては有毒性のものである、卽ち反實扶的里亞血清液はかゝる性質を應用して出來たものである、從つて之と同じく肉體の一切の部分に向つて反對な有毒血清を造る事は可能である、次に注意す可きは其量であるが、若しかゝる血清の多量を用ひると如上の效果卽ち有毒の性質を現はすが、之が少量だと却て其反對に其機能を盛にする結果を

起すのである、即ち心臟の働きを增そうとすれば、心臟に對する有毒な血清の少量を用ひれば效果があるのである、即ち此理を應用して高等細胞を强める爲には之れに適應した有毒性血清の少量を用ひればよいのである、只かゝる血清を造る事が今日に於て充分に發達してゐないのが怨みである。

次に擧げた老衰の大原因は大腸の黴菌である、從つて之を人體から除去する事は縮命の源を絕つ所以である、現に多くの患者は手術によつて大腸を無くした者が居るが、彼等の消化には何等の差支もないのである、然し手術法の未だ完全でない今日に於て何人にも之を勸める事は出來ないが、恐れる處は大腸內の腐敗物から起る黴菌故、之に對する防腐劑を施せばいゝわけである、此方法の第一として吾々は一旦沸騰した食物をとる事を行はねばならない。



抑も黴菌學の起る前から人は防腐劑に就て色々の經驗を有して居た、もとより一切の腐敗物は有毒性のものではないが食物にとつては殊に注意を要すべき事である、古くから酸は肉や野菜を畜へる防腐劑として知られて居る、乳や砂糖は自ら酸を出すので自身防腐の力を持つて居る、多くの野菜も自ら酸を出すが北國等で新しい野菜を得難い處では之を酸敗さして保存して居る、其酸の主なものは乳酸(Lactic acid)である、牛酪の長くもつのも其內に乳酸を含むからである、かく乳酸醱酵は防腐力を持つてゐる故に種々の事に應用せられてゐる、若しかゝる酸が腐敗を防止する爲に效力があるなら何故大腸內の黴菌を殺す事に用ひられないであらうか。

かく乳酸が腐敗を防止する事は即ち一種の黴菌作用による事はパストッール

によつて知られてある、此同じ作用が大腸内に應用せられるかゞ問題であるがコエンディ等の實驗によれば、かゝる乳酸菌は大腸内の腐敗を止める事に於て效があつたのである、人は久しい以前から知らずして酸敗乳（Soured milk）ケフィール（Kephir）等を食にとつて大腸内の黴菌を自ら禦いで居たのである、聖書には酸敗乳の事が屢々出てくる、埃及で用ひられてゐる水牛や羊の乳からとつた所謂 Leben raib やバルカン半島でよく知れてゐる Yahourth やアルゲリア人の用ひゐてる Leben は皆一種の酸敗乳で露國や亞非利加等で常用せられてゐるものも凝固した牛酪である、是等の食物が吾々の體にとつて如何に有用であるかは明かである、Kephir と呼ばれてゐるものも元より多くの乳酸菌を含むでゐるが同時に酒精醗酵をするから衞生上には餘りよくない。



事實の示す處によればかゝる酸敗乳を用ひてゐる地方には甚だ高齢の人が多いのである、アラビアの遊牧民は殆ど駱駝の乳で生活してゐるが彼等には非常に長命な人が多く然も壯健なものに甚だ富んで居る、かの Yahourth や酸敗乳を用ひてるブルガリアには百歳の壽を保つ人が甚だ多い、此事實は即ち乳酸菌が大腸内の腐敗を止め從て生命を延長せしめる事を示して居るのである、故に吾々が日々適宜に之を用ひる事は最も必要な事と云はねばならない、此點よりして原乳から得た酸敗乳は功果があるが、原乳にも有害物を含有するから一端沸騰した乳から造る事が必要である、然しかゝる乳に Maya と呼ばれてる酵母を交ずると更に有效である、研究の結果によればブルガリア菌（Bulgarian bacillus）が最も多く乳酸を出す事に於て效力がある、且つその味をよくする爲に他

の乳酸菌の一種たる Paralactic bacillus を加へるのを可とする、若しブルガリア菌を乳に入れずに只で用ひる人があるなら之に乳酸を起さす爲に砂糖を混じるのを要する、或人はかゝる黴菌を飲む事が何故に健康にとつて有益であるかを訝るかも知れないが、一切の黴菌を有毒性のものと思ふのは非常な謬見で、この乳酸菌の如きは最も有益なものなのである、かく如上の治療法が吾々人性の不調和を除く爲に根本的に須要であり有效である事は、學說上より又事實上より證明し得るのである。

或讀者は何故人の生命を徒らに延長する事が吾々にとつて幸福であるかを不思議に思ふ人があるかも知れない、げに肉體も精神も衰弱を來す時期を空しく延長する事によつて人生は更に不幸の生活を持續するが如くに思へる、然しか



かる見解は根本的に誤謬である。

抑も吾々の人生に對する態度は年齡に於て大差がある、厭世の思想を起す事が生命の執着に薄い青年期に多い事は事實で、年月はかゝる思想を變化さすのである、人心は年と共に進化發展する事を忘れてはならない、人は晩年に於てこそ眞の人生の價値を味識し得るのである、從つて生命の延長は厭世主義を除去する所以である、然も生命の延長とは完全なる生理的生涯を意味するが故に、何等病理的原因より來る老衰の悲哀が高齡に伴なつて居ない、卽ち肉體の壯健と知識の明確とは一生を通じて保持せられるのである、從つて年月による豐富な經驗は正に社會に向つて大なる力となる可きである、社會がかゝる人によつて進化改造を遂げる事は文化にとつて最も有利な事と云はねばならない、今の

世は餘りに若い人によつて凡ての事が支配せられてある、經驗豐かに人生の意義を味識した高齢の人と、思慮淺く感情に烈しい青年と何れが社會にとつて高き位置を占む可きかは自ら明かである、今の社會に於て事實上老人が萎縮して何等社會の爲めに盡し得ないのは、人生に與へられた天賦の性より云つて甚しく不順な事である、吾々は完全な人性の過程によつて達せられる高齢の福音を唱導せねばならない、然も年齢の延長によつて生理的生活を完ふする事は、やがて人生の最も光輝ある歸趣とも云ふ可き死の本能を齎して、平和なる自からなる自然死を持ち來すのである、吾々はかゝる一生を順生涯(Orthobiosis)と呼びたい、卽ち此順生涯を終ゆる時人は人生の眞の幸福を味ひ得るのである、吾人生の奧底には實にかゝる幸福の可能性が深く鏤刻せられてあるのである。



## 五　個人と社會

### 一　生物史上より見たる個人と社會

かゝる人性の研究より來る人間の價値は、玆に對社會の問題に觸れねばならない、吾々は社會の前に立てる個人の位置を窺ひ、斯て吾等の順生涯に於ける社會的個人としての價値を明かにせねばならない、近世の思想が個人の蹂躙を憤つて立つた事は著しい事であるが、吾々は玆に生物史上より此個人の價値を明かにしなければならないのである、卽ち一個の生物としての人類は其進化發展の事實及意義よりして、個人は如何なる關係を社會に對して持つて居るのであらうか、之を解く事は此人生觀より來る道德問題と大きな關係があるのである。

吾々人生の理想は要するに完全なる個人としての性を充實する事にあつた、換言すれば自然的生理的生涯を完ふする事に吾人の本務があるのである、而して此個人の發展を企圖する事が、徒らなる個人主義に非ずして生物進化の原則と一致する事を茲に書かねばならない。

人は此地球に存する唯一の社會的動物ではない、蟻の如き又珊瑚の如き最も其よい例である、從つてかゝる動物の社會的關係を精密に研究する事は、やがて人類の社會問題を規定する上に於て重要な論材を齎すのである、茲に問題の中心となるものは、社會は如何なる程度迄個人の犧牲を要し、又個人は如何なる點迄社會より自由を保つ可きかである。一言にして云へは犧牲問題に歸着する。



吾々が生物界を見る時個性が全體の爲に犧牲になつてゐる事實を屢々見るのである、かの暴虐による自然死の實例中に擧げた如きも其一例である、然し溯つて下等な生物を窺ふ時は更に此事實を明かに見るのである、吾々は森の中の朽ちた木や葉の上に屢々或微細な植物を見る事がある、それは變形菌（Myxomycetes）と云つて其小さな囊の中には多くの胞子が含まれて居る、之が一旦水に觸れると中から小さな有機體が出てくる、然し彼等の一個として生命は非常に短く、互に觸れ合ふと直ちに混合して一つの大きな團體になる、之を原形體（Plasmodium）と呼んで之が葉の上を靜かに下方へと流れる、之は生物中個體が全然社會の爲に犧牲になつた一例である。然し之より進化したものになると幾分か個性を認める事が出來る。水螅（Polypus）は其例で海中に暗礁を作つて居るが、

彼等は個體の集合によつて生活してゐるので決して單獨に生活し得ないのである、其内で珊瑚の如きものは各個體が口や胃を持つてゐるに拘はらず他の器官は全く全體の共有物なのである、又同じ類の動物で各個體が一器官例へば胃とか運動器官とかをのみ擔當して、是等の諸器官が集合して一つの全體をなして社會生活を送つてゐるものがある、卽ち一個體は或一器官の作用をするのみで全く他の器官を缺いて居るのである、又管狀水母(Siphonophora)の類で *Eudoxia* と呼ばれるものは二つの個體の集合からなつて一方は全く運動ばかりし他方は消化作用と生殖作用とをして其缺を補つて居る、又海鞘(Ascidians)の類で *Bobyllus* と云はれてゐるものは各個に口や消化器を持つて居るが排泄窩だけは全く共通物なのである、如上の例は卽ち個體の或部分のみが個性を保持して他



の凡ての部分は全く社會の犧牲となつてゐる事を示して居る、かゝる動物より更に進化したもので社會的生活を營んでゐるものは昆蟲類である。

蟻や蜂は殊に發達した社會本能を持つてゐるので早くから人の注意を引いて居る、彼等は各個に分擔せられた職務があつて凡て子孫の爲に働いて居る、卵を產む可き女王は主として其爲にのみ存して、彼女の他の官能は著しく衰頽を來してゐる、勞働を事とするものは女王や子孫の爲に日々食物を蓄へるのに忙がしい、之が爲に彼等は鋭敏な性質を持つて居るが、彼等には全く生殖の能力が缺けて居る、戰鬪を事とする兵士は又鋭利な力を持つて居るが等しく中性である、又密を蓄へる事を主とするものは、只他人の食物の爲にのみ生存してゐるのである、彼等は時として其密を餘りに含む爲に運動の自由を失つて死ぬものが

ある、かく昆蟲の社會關係は甚だ發達して、各個に分業がある爲に整然として其秩序が保たれてある、然しかゝる社會を形造る爲に、社會は各個體の或性質の全き犧牲を要して居る、從つて彼等の社會組織はかの變形菌や珊瑚の類より發達してゐるが尙個體として生殖の能力を缺くが如きは未だ完全なる個性の發展を意味しないのである、從つて彼等の社會もかゝる個體の不順な性を要する限りそれを完全圓滿なものと見る事は出來ないのである。

以上の生物史上の事實よりして、社會生活の進化は個性の發展を伴なつて居る、從つて其原則よりすれば社會が完全なる發達を遂げる時、個人も亦完全なる充實を遂ぐ可きである、多くの哲學者や道德家は、社會國家の爲に個人を全く犧牲にする事を美德なりとして唱導してゐるが、彼等は人類をして變形菌の如



き下等生物に退化する事を說くのと等しい、生物の進化は、個人と社會との發達が相呼應す可き事を示して居る、從つて吾々は個人の全き犧牲を美德なりとする思想を、生物史上の原則よりして否認せねばならない。

蜂や蟻の社會より進んだ動物になると、全く個體の獨立が見られる、卽ち彼等は個體として要する凡ての器官を各々持つて居る、然し其社會性は未だ充分とは云へない、脊推動物で發達した社會生活を營むものは吾々人類が始めてゞある、かの猿猴類にも此社會性は甚だ微弱である、從つて人類が新に得た此社會本能には、各自に甚だ强い自意識を伴つてゐる、もとより吾等人間には昆蟲類より發達した分業が行はれて居るが、個人間には何等の差違もない、卽ち中性を要するが如き社會から進化して、吾々は各人に於て等しい器官能力を與へ

られて居るのである、かの多くの宗教家が嚴しい禁慾主義を保持してゐる如きは、與へられたる個性の發展を阻害して、中性の如き不完全な狀態に溯らすのと等しいのである。

然らば個人と社會とは如何なる點に於て調和せられるのであらうか、抑も人の一生は凡そ二期に分れる、第一は主として生殖の時期で第二は主として此能力が終えて社會子孫の爲に存する時期である、*Halictus quadricinctus* と呼ばれてゐる蜂は子を產む時期が過ぎても暫く子を守る爲に生きて居るが、之が人になると尙更發達して居る、四五十歲で女は普通に出產の時期を終えるが、それより母たる彼女の務めは主として子の養育に注がれるのである、經驗ある祖母が如何に孫の發育にとつて重要であるかは人の知る處である、今の世に於て老人



は不遇にあるが、若し此人性の研究によつて人が生命の延長を圖り得るなら今後老人は社會上の重要な位置を占む可きである、而して前述の第一期とは卽ち完全なる個人の充實を圖る可き時期と呼應し、第二期はかゝる充實せられた個性を社會の爲に應用す可き時期たるを示して居るのである、道德上の問題たる利己主義も利他主義も此處に歸決せられねばならない、卽ち此兩者の調和は人性の內に見出し得るのである。

社會性の進化は常に個人性の進化を伴なつて居る、從つて個性の滅却犧牲を唱導する事は自然の法則に違反するものである、吾々は充實した個人の發展を待つてこそ、社會に大なる貢獻を始めてなし得るのである、貧弱なる個人より偉大な社會は生れはしない、從つて個人を犧牲にする如き國家社會は未だ不完

全なものと云はねばならない、社會狀態の進化とは犧牲者の減少を意味して居る、換言すれば完全なる個人の發展を期待して居る、多くの道德家は個人性の存在を厭つて、社會の爲に自己を放棄する事を說いて居る、然しかゝる敎へは未だ嘗て大なる效果を齎した事がない、人類全般の平等な幸福の爲にとて立つ社會主義は、個人の自由を宣言して或は共產主義となり或は虛無主義となつて居る、然し個人の充實を計る事に於て彼等の方法には缺點がある、卽ち其結果は全體として個人の沈滯を來す可きである、彼等が完全なる個性の自由を企圖する主義に於ては正しいが、彼等の運動を以て充分なる最後の社會問題の解釋と見る事は出來ないのである、スペンサーは其結果の危險なることを說いた、ニイチエは人道の名の許に個性の蹂躙せられるのを憤つた、然し人智の發達は



いつか凡ての個人に等しき幸福を齎らすにちがひない、吾々が順生涯の價値と意義とを理解する時、社會問題は自ら解決せられねばならない、人々の憤る富者の贅澤はいつか去る時がある、そは個性を充實すべき順生涯にとつて害があるからである、かくて富者が簡易な生活に甘じ貧者は爲に賑はつて、凡ての人の運命は公平に導かれるのである、個人主義と社會主義とは此順生涯於て調和せらる可き筈である、個人の充分なる發展は順生涯の意義である、而してかゝる個人を社會の爲に貢獻する事は其價値である、進化は徐々であらねばならぬかくて努力し知を磨いて此生涯に入らねばならぬ、社會學は先づ生物學を學ぶべきである、生物學は進化が個性の發展を意味し、かくて遂に個人の犧牲を要せざる程に社會が進む可き事を告げてゐる、かくて順生涯は此福祉に到達す可

き唯一の道である。

## 二　ゲーテとファウスト

偉大なる人物の長き生涯は如上の見解の實現せられたものである、從つてかかる人物の研究は人性の眞價を知る上に於て最も興味ある事である、吾々は此科學的人生觀を更に明かにする爲に、其理想的人物の一人として、茲にゲーテを論じ、彼が事多き一生を敍して人性の如何なるものか又如何なる可きものたるかを書かねばならない。

富有の境遇に育ち放逸の性情を有した若き折のゲーテは、早くも其感情的性質を法律に埋めるを得ないで、文學の嗜好は旺溢せる彼の心によき糧を與へたのである、想像深く情緒强い青年時代の常としてゲーテも亦早く現實の桎梏を



厭ひ理想にのみ憧がれたのである、其若き憧憬の滿されざるを知るや彼は遂に人を呪ひ世を厭はねばならない、「ェルテルの悲哀」とは此心を殘りなく云ひ表はしたものである。ロッテとの戀が破るゝや此世は彼にとつて果なき夢に過ぎなかつた、自ら狂へる若きェルテルは早熟より來る精神の異常をよく示して居る、餘りに早き愛の衝動は彼の心を千々に亂したのである、失戀より來る彼の厭世的思想と其悲劇的終焉とは、共に不調和ある青年期の描寫として殘りないものである、此ェルテルの悲哀を自らに味識した若きゲーテは其人生觀に於て著しく悲觀的であつた、彼が當時自殺の心を愛した事は記錄に傳へられてある、「吾は此世の爲に作られず」とは彼の心にしみ渡つた悲の聲であつた。

然し彼が生涯の移變は幾度か彼の思想を變化さしめて居る、彼は此精神の危

期を事業に詩作に又愛に逃れたのである、ヘレーネとの愛は此惱を癒す可きものであつた、かくてワイマーの宮廷に入るや彼は事業に與り科學に耽りて餘事なかつたのである、然しかゝる繁忙の際にも彼の才能は餘地を有して幾多の詩篇は其間に作られたのである、加ふるにフォン・シュタイン夫人に對する情は彼を更に活かしめたのである、エルテルの悲哀を逃れて漸く樂天の生涯に入つた當時の彼には愛は偉大なる力であつた、然も程なくして此力の破るゝや三十七歳のゲーテは再び若き折の悲哀を嘗めざるを得なかつたのである、「あはれエルテルの著書をして誠に彼が頭腦を碎かしめなば」とは彼の追憶である、彼は此惱みを癒す可く遠く花咲く伊太利の地に入つたのである、古き藝術の國は彼の希ひを欺かなかつた、然もミランの一小女リヂーに逢ふ事を得て其饑を滿したの



である、かくて伊太利滯在は再びゲーテを甦らしむ可き生命の泉であつた、若き折の悲にかへて人生の誠の悅を感じたのは此時代である、ゲーテは四十歳にして始めて彼の樂天的生涯に入つたのである、此事實はよく年齡が人生に對する見解を異にせしむる實例と見る可きである。

飽く事を知らないゲーテの才能は、年のすゝむにつれて其大を增し其深さを加へてゐる、彼が知識彼が事業は更に其光輝を添えて八十有餘の齡に達しても尙彼の活動は止まなかつたのである、晩年に於て彼が人生を樂んでかゝる仕事を續けた事は人性の最も正順な現象と見ねばならない、然も彼にして若し若い折に更に健康を注意したならば更に光榮ある幾年の生涯を加へたにちがひない、かの天才のシーラーも、多量の酒によつて夭折の悲しみを見ねばならなか

つたのである。

ゲーテに於て特に著しい事實は彼の八十有餘歳の一生が殆ど戀愛の生涯である事である、文學界に彼の名を重からしめた其力を吾々は彼の戀に見ねばならない、謗るものはかくて彼の道德心を罵り、辯ずるものはそが唯純なる藝術的發露に外ならないのを唱へて居る、然し彼等は二つ乍らに正しい見解ではない抑も一切の種類の天才が戀愛の力に密な關係を有してゐる事は注意す可き事實である、吾々は藝術的傾向を第二生殖性と認めざるを得ない、かの古代に於て强壯なる體格を有し、遊戯に秀で、辯舌に巧みなる事が、如何ばかり異性の力を引いたかは明かである、音樂や詩歌も所詮は女性に對する衝動によつて生れたものである、特に藝術的天才が戀愛と密接な關係を有するのも之が爲である、



ゲーテの生涯とは要するに人性の最も明かな發現に外ならない、之を謗り之を辯ずる事は共に意味なき事である、げにゲーテの戀情は度を越えた力である、然しかゝる事實は嘗て彼を小にはしなかつた、殊に注意す可きは晩年に於ても彼の愛の活動が止まなかつた事である、人は七十四歳のゲーテが十九歳のウルリケに戀惱むだ事を嘲つて云ふ、然しかゝる事實は强健なる老天才の、與へられたる性より來る自然の發露である、老いたる彼が此一少女の手をとつて舞つた時、彼は「多年かゝる肉體と精神との健康を樂しんだ事はなかつた」のである、ゲーテが彼女に對する愛は彼を病ましむる程强かつたのである、遂に此愛が破れるや彼は制し難い悲哀を嘗めざるを得なかつた、彼が秀でたるマリエンバードの輓歌は、かくて此痛ましき經驗を綴つたものである、彼がウルリケに對

する憧憬はゲーテが最後の著しい戀であつたが、彼は死の床に就く迄常に美はしき女性を要したのである、「黑髮もてる如何に美はしき乙女よ」とは彼の終焉が近づいた時に告げた言葉である。

以上の事實は如何に老年に至る迄愛の力が保持せられ、之が偉大なる事業を産む可き力になつてゐるかを告げて居る、若しゲーテにして若い折に去勢したならば彼は吾々に與へられた如きゲーテではなかつた、道德家は爲に滿足す可きも世界は一大詩人を失なうのである、イブセンやユーゴーも又彼の如き生涯を送つた天才であつた、然もゲーテの肉體が晩年に於て甚だ壯健であつた事は人々の驚いた處である、「彼が七十九歳の折、彼の聲彼の眼は宛ら若者の如くに」輝いてゐつた、然も彼が知識力の偉大は更に驚嘆に價す可きものであつた、彼



が新知識に對する慾望は終生止まなかつた處である、然も彼の理解力と記憶力とは殆ど異常と迄云はれて居る、彼は八十四歳に達して尙人生の疲れを知らなかつた、彼がファウスト第二卷の校閲は彼の逝く少し前に終つたのである、恐らくはファウストに與へた百歳の壽は彼自らの欲した處にちがひない。

晩年に於けるゲーテはかくて眞に人生を理解し、祝福ある天賦の賜物を味つた人である、吾々は彼の偉大を讃美せざるを得ない、げにゲーテが悠大なる一生は正に順生涯の光輝ある發現である。

「ゲーテはファウスト、ファウストはゲーテ也」とは此大詩人を傳へたビールショウスキーの言葉である、げにゲーテの性格、生涯と此ファウストに畫かれた人生觀とには密接な關係が潛んで居る、從つて此傑作に畫かれた思想のあと

を辿る事は此人生觀を更に闡明にする所以ともなる。

ファウストの二つの卷は、やがてゲーテが生涯の厭世的及樂天的の二期と相呼應して居る、第一卷は彼の若い時に書き始めたもので、通俗的道德に抗して一少女フレデリケを戀した彼自身の經驗を畫いたもので、玆にはマルガレーテの名によつて不滅の姿を止めてゐる、ファウストは知識あり識見ある人たり乍らそこに滿足を得ずして人生の問題に惱み、其謎を說かんとして想ひ煩つたのである、かゝるファウストにとつて此世のものは凡て彼に恐怖を齎し暗黑を示すに過ぎなかつた、「よしそが空滅を意味すとも、今は快く意を決してかゝる生涯を脫すべき時なり」とは彼の嘆きである、かくて毒盃を手にして將に唇に觸れた時、偶々戶外に響く歌の音は再び彼を甦らしたのである、外に出て幼時の



思ひ出に再び春を夢み樣として然も心穩かならず、

「あはれ吾が胸には二つの靈宿り
かたみに離れんとは企つるなり」

人の苦に存する此二つの靈の不調和は巧みにもファウストの心裡を云ひ表はしたものである、想ひ迷つたファウストは二つの道を判く可き術を知らないのである、感情をもて戲れんには彼は餘りに年老い、慾なからんには餘りに若き苦を覺えるのである、今は死か愛か、ファウストはかろくも愛の中に己れを見出し得たのである、人生に滿足を得ず知識に憩ふを得ず世を悲み人を呪つた彼は、始めて少女マルガレーテの手に懷かれて生命の喜を覺えたのである、此二人の物語こそ世に不朽の文學を殘したのである、然もファウストとマルガレー

テとの愛の終りは痛ましきものであつた、彼女は子を殺し母を害しかくて自らの生命をも傷けたのである、ファウストは之を見て狂へるが如く「あはれ吾れにして生れざりせば」と、之を要するに第一卷に於けるファウストは才あふれ知たけ、此人生より餘り多くのものを期待して得られず、かくて烈しき戀に活きて自らを束し世を呪つたのである、然も彼は再び起つて此人生の危期より逃れねばならない、第二の卷はかくて始まるのである。

第一卷によき讀者を有するファウストは、不幸にして第二卷に於ては其内容の不明を以て人々より餘り顧みられて居ない、ゲーテ學者すらも其註釋に甚しく困難を感じて居る、げに第二卷は重要でない多くの事が含まて居るが、然もヘレナの事と彼が社會に對する事業とは吾々の注意に價す可き事柄である。



抑もゲーテの一生が戀愛と離れ難い關係がある事は前述の如くであるが特に晩年に於ける彼の愛と事業とは吾人の熟慮す可き處である、此第二卷に於て年老いたファウストがヘレナに對する至情はゲーテ自らの經驗を畫いたものに外ならない、人生の危期に陷つて新なる生命を希望する彼にとつては愛は偉大なる力であつた、消えゆくヘレナの姿を見たるファウストはかくて昏醉して斃れてあつた、目覺めたる彼は遂にパリスの擔ふヘレナを追はねばならない、然も嘗て若きファウストがマルガレーテに戀した想ひとは異つて、今や彼はヘレナを美の玉座にする自ら其前に跪いて女性の美と力とを讃美するのである、多くの註釋者は此ファウストとヘレナとの契を以て浪漫主義と古典主義との調和を暗示したものと解して、その二人より生れたる子をかのバイロンを體現せしめた

ものと考へて居る、然しかゝる見解は恐らくはゲーテの眞意ではない、彼は此二人の至情に於て人の晩年に於けるプラトニックの愛を書き表はしたのである、かゝる愛が尙年老いて後も事業を鼓舞す可き力たる事を示したのである、然も子を失つてヘレナと別るゝや彼は又其慰藉を何處にか求めねばならない、年老いたる彼は殘されたる衣に、只愛の記憶をくり返すばかりである、然し彼は更に高い生涯を仰望して、大膽なる企圖に向つて新なる力を感じねばならない、かゝる樂天的態度は若いファウストには見難い事である、彼はかくて公共の爲に一身を獻ぐる事を期して人生の終局を完ふせん事を希つたのである、此最後のファウストの行爲は多くの學者からゲーテの道德思想の精華を示すものと云はれて居る、かくて彼等は之によつて社會の幸福に對する個人の犧牲を唱導し



たものとして居る、リュキスの如きも此見解をとつてファウストは一切の個人の慾望を斷絶して人類の爲に活くる處に、人生最後の歸趣を見出したのであると說いて居る、然しかくの如きは吾人にとつては正當な見解ではない、卽ちゲーテは此ファウストに於て人が其生涯の大部分を個人の完成に志す可き事を說き、後半生に於て彼の個人としての知識經驗が豐になつた時、始めて彼の藏蓄を人類の爲に傾注す可き事を唱へたのである、徒らに個人の犧牲を說くが如きは決してゲーテの眞意ではないのである。

要するにゲーテの生涯、ファウストの二卷は最もよき順生涯の說明である、若きヱルテルの悲哀は年老いてファウストの歡喜に歸らねばならぬ、吾等は前半の生涯を個人の充實に志し、かくて後半の生涯を社會に貢獻せねばならぬ、

肉體と精神との健康は順生涯に於て常にゲーテの一生の如く保たれるのであるかくて愛は人生を活かし、年老いて尙そがプラトニックの形に於て人の事業を鼓舞するのである、かくてかのファウストは完全なる順生涯を終えて百の齡を保ちつゝ幸ある自然死の本能に、人生最後の榮光を見出し得たのである、かくて天上には神祕の唱朗らかにかく響くのである。

「言ひしらぬ一とことは
こゝに現じぬ、
久遠の女性こそ
われ等を翼け上ぐるなれ」。

三　結　論



人は長い間病に苦み死を怖れて不安の裡に此人生を送つたのである、宗教と哲學とは之が救濟の爲に起つて、來世の存在を敎へ宇宙の本體を說いたのである、然も文化と共に懷疑の念は漲つて、人はかゝる信仰思想を訝りつゝ、依然として人生の謎に迷ふのである、かゝる間に科學は徐々として其歩を進めた、「吾等は何處より來りたるや」かゝる大なる疑問は嘗て天地創造の思想によつて說かれたのである、然し此朧ろげな想像を去つて、生物學は明かに進化の過程を說いたのである、「吾等は何處に行く可きや」此第二の問はかくて又答へられねばならない、死は空滅を意味するのであらうか、果して吾等は此人生を終えて永遠の來世に活くるのであらうか、若し後者の見解にして誤りがあるなら、吾等は如何にして避け難き死に面す可きであらうか、宗敎哲學を離れて今や科學は

此問題を解かねばならない、此人性の研究に基いた科學的人生觀は要するにかかる生と死との問題に對する解答である。

研究の結果によれば人類は猿猴類の後裔たり乍ら、性質と境遇との過激な變化の爲に、其生存に向つて幾多の不調和な性を承け繼いだのである、之がやがて疾病の原因となり、老衰を早め、悲慘な不自然の死を起させるのである、人生に對する憂苦はかゝる事實に萠して、遂に人の心に厭世の思想を深く刻ましめたのである、未來に於ける樂園の希望は哀れなる人心の要求に外ならない、然も理智の文明に育つた吾々は遂にかゝる信仰に安んず可き術を知らない、近世の思想が著しく破壞絶望の傾向を示してゐるのも之が爲である、然しかゝる思想は人間の性の如何なるものたるかを詳にしない爲である、今や科學的攻究によ



つて人性には幾多の不調和な性が含まれてゐる事を明にした、今の人の甚しき矛盾あり苦悶ある不順の生涯は皆之が爲に外ならないのである、吾等にして若し失はれたる人生の幸福を挽回し樣とするならば、かゝる不調和な性を除く事を企てねばならない、卽ち不幸ある人性より離脫する爲に、吾々の理想に向つて人生を改變せねばならない、然も科學はかゝる事の可能なるを示して居る、かの有名なブルバンクが己れの目的の爲に、多くの植物に理想的の變化を施して、更によい花を結ばした樣に、科學的哲學者は自己の理想に從つて此不完全な人性の改變を志さねばならない、進化す可き能力を有する人性は決して不變のものではなく更に改造せらる可きものである、而してかゝる結果を得る爲に吾々は先づ人性に關する知識と經驗とを積まねばならない。

かく吾々は現在の人性に滿足する事は出來ない、吾々は理想を實現する爲に努力して之を改變すべきである、かくして調和ある自然の生涯は完ふせられ、所謂順生涯を送り得るのである、そこには疾病なく、衰頽なく長き生命の後に死の本能を得て平和なる自然死に入るのである、人性とはかゝる幸福の可能性を深く其根底に宿して居る、換言すれば人性とは其本質に於て樂天的たる可きものである、吾々が人生の一切の懊惱はかゝる順生涯によつて解かれねばならない、かの生理的生涯を完ふして新なる死の本能により、何等の恐怖何等の苦悶なくして平和なる終焉を遂ぐる處に、人生究竟の歸趣は存するのである、げに科學は來世の存在を否定する、然し人性の祝福ある自然死を謳歌するのである、之をしも人生の最も光榮ある王冠と見ずして、徒らに生命を厭ひ、其安住



を彼岸に希ふが如きは、與へられたる人性の何者たるかを知らないが故である。

かくて厭世主義とは決して吾等が人智によつて到達し得べき最後の解決ではない、然も厭世主義が年齢と密接な關係がある事は前述の如くである、かの世を呪ひ自を殺さんと迄した若きファウストが、年老いて人生の價値を味識しつつ最後の事業に一身を委ねた事は人の知る處である、かゝる厭世の思想は年と共に變らねばならぬ、「吾等が年老うる時、此世の多くの事は、若き折に思ひしそれと、凡て別種の趣を呈す」とはゲーテの言葉であつた、かゝる精神の進化はやがて樂天的人生觀の基礎をなす可きものである、厭世主義とは常に一時的性質を有するものである、人性の根底に潛む法則によつて、いつかそは樂天の思想に變らねばならない。

然も年齢が齎らす福音は之に止まらない、今の世に於ては老人は寧ろ社會の重荷を增すが如き觀がある、然しこの人性の研究に從へば順生涯を送る時、人は死に至る迄健全なる肉體と精神とを保持するのである、從つて經驗ある高齢の人が社會にとつて如何に價値あるかは明かである、今の世は餘り若き人々が社會の重要な位置を占め過ぎて居る、人性の不調和の爲に早き老衰を來して社會から不遇を受ける事は甚しく不順な事である、此人生觀が實現せられる時、社會は遙に多く老人に負ふ處があらねばならない、順生涯に於ける高齢の價値は社會の發展にとつて看過す可からざるものである。

吾等はかゝる人性の意義を完ふする爲に、先づ個性の充實を計らねばならない、かくしてこそ始めて社會に價値ある人となり得るのである、此順生涯に於



て吾等は個人と社會とのよき調和を見得るのである、從つて個性の充實を阻害する事は、個人としての全きを缺き、社會の人としての務を忘れる事である、一切の不道德的行爲は人性の價値を知らないのに基いてゐる、かの順生涯の如何なるものたるかを理解する事はやがて吾人の本務を完ふする所以である、從つて順生涯を毀損する如きは不倫の行爲である、茲に此人生觀より來る道德は湧かねばならない。

先づ健康は吾等をして順生涯を送らしむ可き基礎である、之が爲に吾々を不幸にする病源と戰はねばならない、今の世は餘りに肉體の價値を輕んじるの弊がある、然し肉體の價値を離れて眞の幸福はない、從つて吾人の健康を害する一切の行爲は、順生涯卽ち個性の充實に向つて不倫の行爲である、衞生は更に重

んじられねばならない、奢侈は禁じられねばならない、そは健康を害するからである、酒色に耽る事は止められねばならない、そは吾人の生命を不順にするからである、かくて人性を理解し、其理想の實現を志す時、人は平等になり世は病源を絶つのである、かくて自から社會及性慾の問題は解決せられねばならない、吾等が道德的行爲はかゝる人性に關する知識と發展を共にす可きである、從つてかゝる知識經驗を輕んずる事は道德的に缺陷がある、無智は吾人の卑しむ可き事である、若し母にして子の養育に對する知識を缺く時は、彼女の行爲は子に對して不道德と云はねばならぬ、卽ち豐なる知識と經驗とを以て、與へられたる人性の完全なる發展を志すは、最も道德的行爲である、かくてかゝる順生涯を阻害することは、吾等にとりて不完全な行爲である。



嘗て多くの學者は道德の基礎を信仰の上におき或は理性、良心の上においたのである、卽ち現時の人性を出發點としたのである、然し不調和ある現在の人性は、しかく信賴す可きものではない、吾々は道德の標準を改變せられたる人性の上におかねばならない、多くの惡事は矛盾ある人性より發して居る、從つて不調和ある人性より去け難い彼等の行爲を絶對の惡と思惟するは誤りである、吾等は寧ろ人性の改造を志して惡事の根源を絶つ事を努めねばならない、卽ち完全なる人性の理想に向つて努力す可きである。

在來の道德は又人の社會心を信じ、利他の說を主張したのである、然し人道を達せんには現時の社會心は未だ哀れである、然も如何なる事が眞の利他なるかは疑問である、茲に於て直覺說は、人の道德的行爲を直ちに良心に訴へんと

したのである、然し各人の個性は異なり行爲の動機は複雜である、かゝる態度が如何ばかり正確であるかは疑問である、吾々は道德的行爲を定む可き他の原理を求めねばならない、カントによれば道德的行爲は同情心に見出可きでもなく又人類の幸福を目的とする事でもない、彼は本務の念を以て道德の基礎と考へたのである、然し吾々は改變せられた理想的人性を標準として道德を立てねばならない、かくて道德的行爲が常に合理的理性の上に立つのを要する限り、吾々は人性に關する正確な科學的知識を必要とせねばならない、同情があつても理性なき行爲は道德的に缺點がある。卽ち人性に關する知識によつて、其理想を規定し、かくて其實現に向つて努力する事は吾人のとる可き最も道德的行爲である、換言すれば個人の充分なる發展を阻害しかくて順生涯の到達を傷ける



が如きは不倫の行爲である。

かくて人類の生命が充實を來す時、惡は自ら消滅せねばならない、從つて社會の發達は遂に惡に對する同情を必要としない迄に發展す可きである、個人の充實ある生涯とは、他人の干涉を要せざる程の充實ある謂である、人は往々犧牲の美德を說くが、社會國家が個人の犧牲を要する限りそは不完全を意味する—に外ならない、社會の完全とは一切の個人が何等の犧牲同情をも必要しない事を意味して居る、エリオットは彼女の小說 Middlemarch に此思想を述べて居る、一人の夫人があつて公共事業の爲に一身を犧牲にする事を憧れて居た、とある村に來て彼女が此理想を實施し樣とした時、凡ての村人は彼女の慈悲を受ける要なき程に滿足な生活を送つて居たのである、かくて彼女はなす可き術を知ら

ないでそこを去らなければならなかた。

不順なる今の世はいつか正順に歸らねばならない、人性の能力は偉大である、此啓發を企圖する事は只吾等の意志にある、かくて自然なる充實の生涯を經て死の本能に到る時、一切の問題は解決せられ、玆に人生の意義は充されるのである。

白樺第二卷第八—九號掲載——千九百十一年——



# 追補

# 追補

一

「新しき科學」に興味を持たるゝ方に次の本を御勸めする、數多い著書の内から主なもので且つ讀んで面白味のあるものを撰んだのである。

**Lodge, Sir O.: The Survival of Man.**

pp. 376. 7s. Methuen & Co., London.

**Lodge, Sir O.: Man and the Universe.**

pp. 356. 5s. Methuen & Co., London.

**Lombroso, C.: After Death—What?**

pp. 364. Illust. 10s. Fisher Unwin, London.

**Myres, F.W.H.: Human Personality and its Survival of Bodily Death.**

2 vols. 42s. (One vol. 10s. 6d) Longman & Co., London.

**Flammarion, C.: Mysterious Psychic Forces.**

pp. 459. Illust. 8s. 6d. Fisher Unwin, London.

330

**Hyslop, J.H.: Science and a Future Life.**

pp. 370. $1.50 Small Maynard & Co., Boston.

**Hyslop, J. H.: Enigmas of Psychical Research.**

pp. 427 $1.50 Small Maynard & Co., Boston.

**Podmore, F.: Modern Spiritualism.**

2 vols. 21s. Methuen & Co. London.

**Podmore, F.: The Newer Spiritism.**

pp. 320. 8s. 6d. Fisher Unwin, London.

**Carrington, H.: The Physical Phenomena of Spiritualism.**

pp. 435. 10s. 6d. Illust. Werner Laurie, London.

331

**Carrington, H.: The Coming Science.**

pp. 384. 7s. 6d. Werner Laurie, London.

**Carrington, H: Eusapia Palladino and Her Phenomena.**

pp. 353. Illust. 10s. 6d. Werner Laurie, London.

**Tanner A. E.: Studies in Spiritism.**

pp. 408. Appletons, New York.

**Janet, P.: The Mental States of Hystericals.**

$ 3. 50. Putnam & Sons, New York.

**Jastraw, J.: The Subconscious.**

10s. Constable & Co. London.

**Münsterberg, H.: Psychotherapy.**

8s. 6d. Fisher Unwin, London.

雑誌では Society for Psychical Research から "Proceedings" が出版されてゐる、一年三冊で七圓程かゝる、其他 W. Rider & Son から月刊雑誌 The Occult Review が出てゐる、一年分四圓程である、日本の占術や巫子の事を研究した本では、



**Lowell, P.: Occult Japan.**

pp. 389. $1.50. Houghton Mifflin Co., New York.

著者は有名な火星研究者である。

二

メチニコフの著書の英譯されたものは三つある、

**WORKS OF PROF. ÉLIE METCHNIKOFF**

IN

The English Translation from the French

BY

**P. Chalmers Mitchell.**

1. **THE NATURE OF MAN.** Studies in Optimistic Philosophy.

pp. xviii + 309 Illust. Cr. 8vo. 6s. net. 1903.

William Heinemann, London.

**DITTO.** (*The American Edition*) 8° Illust. $2.00.

G. P. Putnam's Sons, New York.

2. **THE PROLONGATION OF LIFE.** Optimistic Studies.

pp. xx + 343. Illust. Cr. 8vo. 6s. net. 1907.

William Heinemann, London.

**DITTO.** (*The American Edition*) 8° Illust. $2.50.

G. P. Putnam's Sons, New York.

3. **THE NEW HYGIENE.**

Lectures on Prevention of Infectious Diseases. 1906 2s. 6d.

William Heinemann, London.

月刊雜誌

# 白樺

美術
文學
藝術

Irving by Beardsley.

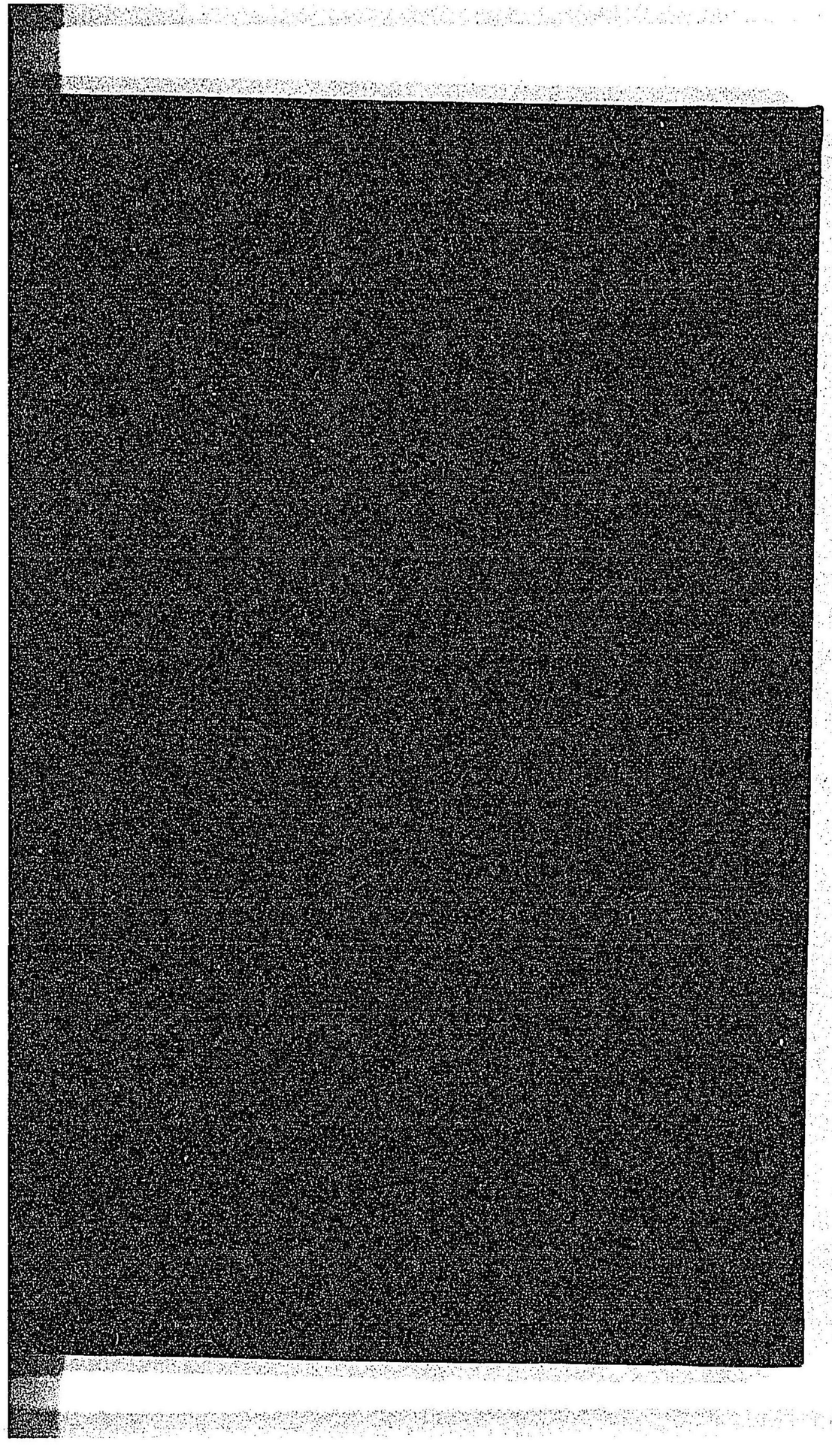
白樺第一卷第三號より

明治四十四年九月二十八日印刷
明治四十四年十月一日発行
定価金壱圓

著作者　東京市麻布区霞町三十五番地
発行者　鈴木斐山
印刷者　東京市本郷区小石川三丁目二番地
印刷所　東京市本郷区春日町三丁目二番地
株式会社秀英舎

発行所　東京市麻布区霞町三十五番地
東京市上野区池之端鶴見町八番地
鈴木斐山
電話　本郷三四一七
大阪三三八八
振替貯金口座　大阪三四一七番

工文57



332
157

052793−000−2

332−157

科学と人生

柳　宗悦／著

M44
CAA−0008